『白鯨』のかくれた意味と象徴(7)

前　田　禮　子

'The Town-Ho's Story'

第LIV章の*'Town-Ho's Story'*は、Pequod号が太平洋上で出合う九隻の船のうちの第二番目の船である。Town-Ho号の話のうち、のちに*Billy Budd*に取り入れられたSteelkiltとRadneyの対決と、*Billy Budd*に取り入れられなかった部分とがあり、その取り去られた部分に、『白鯨』の虚構としての独自さがある。

Town-Ho号の船底から水が溢れ出てくる。原因も漏水個所も発見できない。この水は、まるで淡水であるかのようにえがかれている。奇跡と呼ぶほかはないこの事件が、*'Town-Ho's Story'*のかくされた部分である。

> …indeed, they could not find it (=the leak) after searching the hold as low down as possible (p. 323)
>
> So when they were working that evening at the pumps, …as they stood with their feet continually overflowed by the rippling clear water, clear as any mountain spring, gentlemen——that bubbling from the pumps ran across the deck, and poured itself out in steady spouts at the lee scupper-holes. (p. 326)

ポンプで、扱み出した水が、溢れ出て、彼等の足を洗い、さざ波を立て、どんな山の泉から溢れでる水にも劣らず清らかな(clear)な水である、ということだが、太平洋の真中の海水がclearで澄んでいるのは云うまでもないが、それをあえて、どんな山の泉にもおとらず、と云っているのは、clearに、真水、の意があるからかもしれない。それを裏づけるかのように、つぎの文がある。

> Aye, aye, my merry lads, it's a lively leak this, hold a cannikan, one of ye, and let's have a taste. By the lord, it's worth bottling! (p. 327)

Steelkiltは、水を飲んで味をみてみようじゃないか、と云う。また、これは驚いた、神かけて、びん詰めにしておく価値があるぞ、と云う。冗談で云っているように聞こえるが、この水が真水である可能性はあり、この点を含めて、Town-Ho号の事件をTown-Ho号の船乗りたちは、この秘密は自分たちの私有財産であるから口外しないでおこう、と誓いあったのではないか。Town-Ho号の話を語り終ったあとで、Ishmaelは、黄金亭の友人たちと、この話が真実であることを、また、口外しないことを、僧侶を連れてきて聖書にかけて誓いあう。これはSteelkiltとRadneyとの事件にたいしてだけなら、なんとも大げさであ

る。その秘密とは、船底から溢れ出てくる水が真水であったことであると解釈する方が、好都合ではないだろうか。しばしば聖書伝説などには、生命の泉が湧き出すなどの奇跡を伴っているばあいがあるが、*'Town-Ho'*にはそのような伝奇性が織りこまれて、真水の湧出が船内に起ったものとして解釈を進めていきたい。

そのようなことが、海を航海している船に起るはずがなく、水の入ってくる穴も見つからないなど、現実ではまったくありえないが、ここで注意しなければならないのは、Town-Ho号の話が『白鯨』の構図を理解する上で、大きな位置を占めていることである。Town-Ho号の船上で確かに起ったと書かれている奇跡を認めないなら、『白鯨』の意味や象徴性が成り立たなくなる。『白鯨』は白い鯨という虚構の上に成り立っている探求説話であるから、その中で語られる奇跡の話はすべて、それらが科学の事実に反しているかいないかといったことは、どうでもよいのであり、作品の中で論理性と一貫性を持つなら、奇跡は、意味をもつことになる。『白鯨』の話は奇跡にみちあふれている。Melvilleは、事実と科学的根拠を積み上げて、彼の説の正当性を示そうとするように見えるが、じつは、Melvilleは、起りえないことが起りうる可能性がある、と『白鯨』では示し続けており、したがって、『白鯨』は、徹底した奇跡物語である。

Town-Ho号の、湧水事件と、つづいて起ったSteelkiltとRadneyの対決とは、互いに関連する事件であるが、それらが起った場所は、黄金亭から西へ数日の航程のところにある。Pequod号は、Goney号に出会ってほどなくTown-Ho号に会う。漏水の生じた場所は、赤道と日付変更線の交わるあたりになる。そこは、Pequod号が白鯨とともに去ったあたりである（Feidelson版の地図参照）。

*'Town-Ho'*の章のはじめにCape of Good Hopeについての言及がある。アフリカ南端のCape of Good Hopeの周辺の水域が交通の要地になっている、とまず述べられている。ここで云われている交通の要地とは、かくれた意味では、巡礼地への遍路、といったような意味があるのが、つぎの文から読みとれる。

> The Cape of Good Hope, and all the watery region round about there, is much like some noted four corners of a great highway, where you meet more travellers than in any other part. (p. 321)

このあたりでは、他のどの地域よりももっとも多くの旅人に出会うは、事実とはいえない。冒頭の、この文は、寓意的に述べられていると受け取るべきだろう。much like some noted four corners of a great highwayは、どこかの目的地に行くための主要通路、あるいは、天路歴程のための通路、などと解釈できる。その理由は、このあたりの世界地図を眺めてみると、Cape of Good HopeとCape Hornは、アフリカ大陸と南アメリカ大陸の南の先端にあり、二つの大陸は、海上に並んだ巨大な二本の柱のようにみえる。Cape of Good HopeとCape Hornの間の海上は、船舶のgreat highwayといえる。Pequad号は、Nantucketか

ら南下してきて、二つの大陸から成る門を通り抜けて、太平洋という大きな水盤の中に入っていくとも云える。The Pacificという固有名詞も、寂滅、涅槃、など、究極の絶対の平安、といった意味をあらわすために、大文字で綴られ抽象化されたものとして用いられている。Cape of Good Hope とCape Hern は、太平洋に入って行くための玄関のような形で立っており、その二つの門柱が、それぞれ、希望のつの、と、豊穣のつの、と名づけられていることになる。鯨を発見したときに挙げるTown-Hoという呼び声は、当時まだGalapagosの食用がめ（terrapin）の漁船で用いられていたとMelvilleの原註にある。Galapagos諸島は、南アメリカ大陸の西の赤道上に位置する。Town-Hoという語にはどんな意味があるのかまず考えてみよう。

townは、語源として、enclosed place ; garden ; fortified place、などの意味がある。封建時代の都市、首都、城市、といった意味がある。Land ho！陸地が見えるぞ、島が見えるぞ、あるいは、海用語として、Eastward ho！おーい、東行きだ、東の方だ、などの用法がある。Town-Hoは、おーい、鯨がいるぞ、という意味の慣用語であるが、章題として使われているのは、云うまでもなく、白鯨がみつかった、白鯨がいるぞ、という意味のためであろう。*'Town-Ho'*では、白鯨について多くは語られていないが、しかしこの章は白鯨について多くを示唆している章である。たとえば、townという語の中にふくまれるenclosed placeの意味は、次の文に見られるように、第CXXXIII章*'The Chase—First Day'*で白鯨の姿が、別世界のものisolated thingであると形容されているが、それと同じものであろう。

> …his entire dazzling hump was distinctly visible, sliding along the sea as if an isolated thing, (p. 689)

そうすると、船名のTown-Hoという語には、ほーい、別世界だ！といった意味がふくまれているだろう。事実、黄金亭で語られるTown-Ho号の物語は、白鯨にまつわる非現実的な、奇跡の世界である。物語が終ったあとで、聖書が取り寄せられ、僧侶が連れて来られて、この物語が事実であるとIshmaelは証言している。Ishmaelが誓ったのは、SteelkiltとRedneyの争いにたいしてではない。

Town-Ho号の物語をIshmaelと三人のDonが語り合ったのは、南米ペルーの、昔の主都Limaである。Limaは、赤道帯の中にある。Peguad号が三日にわたって白鯨を追跡した位置も、LimaやGalopagos Islandsと同様に赤道上である。赤道上は、常夏の、四季を通じて太陽の活動のもっともさかんなところである。Queequegがもっている偶像神はCongo Idol (p. 49) のように黒い、とIshmaelは云っていたが、Congoは赤道上にある。また、*'A Bosom Friend'*で、Ishmaelは、Queequegの出生地について、つぎのように述べているが、これも太陽と関係がある。

> Here was a man some twenty thousand miles from home, by way of Cape Horn, that

is——which was the only way he could get there——as though he were in the planet Jupiter ; (p. 83)

Queequegの故郷へ行くにはCape Hornを通って行くほか道がない、といっているが、その道は、象徴としての道であり、'*Town-Ho*'の冒頭で述べられているような、Cape of Good HopeとCape Hornの間を通るgreat highwayを云うのだろう。この文では、planet Jupiterについて言及されている。Jupiterは太陽神であり、惑星の木星は、占星学では、第二の太陽とみなされている。Queequegの黒さは太陽によるものだと示唆されているのだろう。宿屋にGolden Innという名がつけられている。それは、黄金が太陽を象徴し、不蝕性、不滅性をあらわしているために、付けられたのだろう。黄金亭も、この世のものとはおもわれぬ別世界an isolated placeである。ここに集る人々は、不死と遍在（ubiquity）の人Ishmael、昇天した聖者の名をもつSebastianとPedroなどである。

Town-Ho号の水夫たちは、ほとんどPolynesiansばかりである。この語も本来の字義どうり、多島海の人々(Poly多、nesia＝island)、を意味している。Galapagos諸島も多島海である。とくにGalapagos諸島は赤道直下にあるから、Polynesiansというとき、MelvilleはGalapagos諸島の人々を意識していたかもしれない。彼らは白鯨について信頼度の高い情報を提供する、とIshmelはいう。Town-Ho号の事件についてIshmaelはふしぎな語り方をする。少し長いが、引用してみる。

…she gave us①*strong news of* Moby Dick. To some ②*the general interest in the White Whale was now wildly heightened by a circumstance of the Town-Ho's story,* which seemed③*obscurely* to involve with the whale a certain④*wondrous, inverted visitation* of one of those so called judgements of God which at times are said to over take some men. This ⑤*latter* with its own ⑥*particular accompaniments* forming what may be called the ⑦*secrct part of the tragedy* about to be narrated, never reached the ears of Captain Ahab or his mates. For ⑧*that secret part of the story* was unknown to the captain of the Town-Ho himself. It was ⑨*the private property* of three confederate white seamen of that ship, one of whom, it seems, communicated it to Tashtego with ⑩*Romish injunctions of secrecy,* but the following night Tashtego rambled in his sleep, and revealed so much of it in that way, that when he was wakened he could not well withhold the rest. Nevertheless, so ⑪*potent an influence* did this thing have on those seamen in the Pequod who came to the full knowledge of it, and by such ⑫*a strange delicacy*, to call it so, were they goverened in this matter, that they kept the ⑬*secret among themselves* so that it never transpired abaft the Pequod's main mast. Interweaving in its proper place this ⑭*darker thread* with the story as publicly narrated on the ship, the whole of ⑮*this strange affair* I now proceed to ⑯*put on lasting record.* (p. 322)

Town-Ho号の表向き (publicly narrated) の事件は、数人の水夫による反乱である。この事件がのちの*Billy Budd*のもとになったといわれている。Ishmaelの云うこの事件のdarker threadは何を意味するのだろうか。上記の事件の書き出しの部分のIshmaelの表現には、何かがかくされているのを十分に感じさせるものがる。Pequod号の水夫たちは、Town-Ho号の事件によって、白鯨に激しい関心をかきたてられた、the general interest was now heightencl by a circumstance of the Town-Ho's story, と書かれているが、白鯨と反乱とは、どんな関係があるのだろうか。神の審判の逆方向の到来、wondrous, inverted visitation of one of those so called judgements of God, とは何か。それが白鯨と漠然と関係がある、seemed obscurely to involve with the whale. とはどういうことか。その物語のかくされた部分、that secret part of the story, とは何か。その秘密の部分が三人の白人の結束者の私有財産である、It was the private property of three confederate white seamen of that ship, とは何を意味するのか。その秘密をローマ・カトリック教会の禁止命令でもって口外を禁ずる、with Romish injunction of secrecy, そのものものしさ、しかしその秘密をTashtegoに伝授したのは何の目的のためか。全容を知ったPequod号の男たちに、so potent an influence did this thing have on those seamen in the Pequod who came to the full knowledge, にどんな強力な影響を与えたのか。全容とは何か。この事件に関して彼らが圧倒された不可思議な微妙さ、strange delicacy, とは何か。あまりにも圧倒されたために、それを仲間内の秘密に保った、by such a strange delicacy to call it so, were they governed in this matter, that they kept the secret among themselves, とは何のことか。この事件の流布して語られた部分と、伏せられて語られなかった部分の糸とを織り合せて、永久保存の記録に付したい、Interweaving in its proper place this darker thread with the story as publicly marrated on the ship, the whole of this strange affain I now proceed to put on lasting record, とは一体何のことか。なぜこの事件がそれほどまでにstrange affairなのか。Melvilleはこれらの疑問に直接答えていないが、この作品の中に散在する数多くの象徴や暗示から推測はつく。

神の裁きは、青天の霹靂、落雷、などとして上から来るのがふつうであるが、ここでは原因もなく、船底に穴が見つけられないにもかかわらず、水が溢れ出す。これを下からの霹靂とでもいうのだろうか。Radneyが白鯨にのまれるのもinverted visitationであるのはいうまでもない。Pequod号の水夫たちは、この不思議な浸水を偶然とは見ないで神慮であると感じたようである。Town-Ho号には、ふたつの事件があった。ひとつは、SteelkiltとRadneyの争い、他は、浸水の事件である。ところが、Town-Ho号の船長すら知らなかった話とは、何であったのか。浸水が生じた位置は、Pequod号が沈んだ位置とひじょうに近い。Town-Ho号は、そのとき、

I am about rehearsing to you, gentlemen, the Town-Ho, Sperm Whaler of Nantucket,

was cruising in your Pacific here, not very many days' sail westward from the eaves of this good Golden Inn. She was somewhere to the northward of the Line.

(p. 323)

Limaから西へ数日を経たところ、赤道付近にいたのである。鯨の汐吹きは、体内から体外へ、上に向って吹き上げるのに、Town-Ho号は、船外から船内へ、下からいわば汐が吹き込んで、いってみれば、invertedされた状態で水が入ってくる。その位置へ、白鯨がPequad号を導いて来ようとしている、あるいはPequad号がその位置へ向って進んで行っている、と直感して、Pequod号の水夫たちはso potent an influenceに打たれたのか。偶然によるものであれ、運命によるものであれ、位置の一致をstrange delicacyと呼んだのだろうか。Town-Ho号の状況が白鯨の動きと関連があるというのは、こういった理由によるのではないか。二つの状況を表現するには、strange delicacyは当てはまらない。この語はもっと、subtletyというべき意味をもっており、もっとかくれた意味があるように示唆されている。Town-Ho号の水洩れとPequod号の沈むこと、これらの事件の、いわば、符号の一致を、darker threadやstrange affairと云っているのだろうか。こういったことは、予感の状態でとどめておくべきであって、言葉に表してしまうと、神秘感をともなわぬことになってしまうので、かくしてあるのではないだろうか。奇跡や信仰の奥義などもすべてそうしたもので、語られるべきでないとされている。

上にあげた文の、darker threadやinverted visitationやstrange delicacyなどの語には、かくされた意味があって、この章およびこの作品は、これらのかくされた意味をもつ話の糸が連なってできている。*'EXTRACTS'* の最初にあげられた引用文に、つぎのようなものがある。

"And God created great whales." *Genesis.*

"Leviathan maketh a path to shine after him ; One would think the deep to be hoary."

Job.

この二つの文は、『白鯨』の構成を理解するための大きな鍵となる。それは、鯨は、人間の創造にさきだって創造された最初の被造物であって、たとえば、Jonahの寓話が示しているように、鯨は人間の救済のために準備されたものではないか、という仮説が考えられるからである。鯨の通ったあとにできる白い航跡は、海上に示し出される一筋の道のように見える。その道に沿って、どこまでも従っていけば、もし鯨が神の使者であれば、鯨は神のもとに帰るであろうから、人は神の住居である常住の世界に到達できるかもしれない、という思いがかくされている。*'EXTRACTS'*に引用されている詩篇の句を、そのような角度から眺めることはできないだろうか。

"There go the ships ; there is that Leviathan whom Thou hast made to play therein."

Psalms.

この詩句は、鯨は船であるから、それに乗って楽しく遊びなさい、人はそうするように創られているのだから、と云っている。人は、白鯨という渡し船にのって、想念の中の彼岸の世界へ遊びに行くのもよいと云っているのではないだろうか。Ahabは、彼の頭の中で、白鯨が示す白い道を見出し、それを追って、白鯨とともに彼岸の世界に行こうとしていると仮定してみる。

'*Town-Ho*'は、『白鯨』の中でもっとも長い章であり、一つのまとまった物語として切り離すことができる章である。表面からはかくされて見えないように配慮されているが、この章では、Melvilleの白鯨観がくわしく語られている。'*Whiteness of the Whale*'で語り残された白鯨の意味と目的が、'*Town-Ho*'の章で、補完されるようなかたちで語られている。

'Town-Ho'号の物語を語り合ったスペイン人の、Ishmaelの友人たちの名は、Don PedroとDon Sebastianである。PedroはPeterのスペイン名であり、Spouter-Innの主人Peter Coffinと同じ名前である。天国の番人である大Peterからか、あるいは小Peterから取られたものである。伝説では、Peterは、つぎのようであるといわれている。

Peterは漁師の守護者である。かれは、錠前屋であり、石工である。彼は、イエスによって三大弟子の一人に選ばれる。他の二人は、JamesとJohnである。Jamesは、Jacobとも呼ばれ、彼のためのSantiago巡礼は名高い。Jamesについては、'*Jonah Historically Regarded*'の章で、Jacobの伝説とMoby Dickとが深く結びついているのがわかる。Johnについては、Peter Coffinの息子の一人の名がJohnnyであるとして、'Spouter Inn'で言及されている。またJohnは、'*The Pacific*'の章で、『白鯨』とかかわっているのがわかる。イエスの三大弟子が*Moby-Dick*において、守護者として、大きな象徴的役割をもっている。聖書では、Peterは、水の上を歩いてイエスのもとに来る。彼はイエスによって天国の鍵を与えられ、天国の入口は、Saint Peter's Gateと呼ばれている。彼は、絵画では輝く黄金色のマントをまとっている姿で描かれているが、これは信仰の啓示の象徴とされている（*Dictionary of Mythology*）。Peterの祝祭日は、夏至の頃の6月29日である。彼のマントの黄金色とGolden Innという宿屋の名は、Melvilleによって意識的に結びつけられたものであろうし、Golden InnでIshmaelが他のDonとともにTown-Ho号の話をしたのが、ある聖人祝祭日の前夜、one saint's eve（p. 322）であったことになっている。この日は、Peterの祝祭日であったろうと推測できる。太陽のもっとも盛んな夏至の頃に、赤道に近いLimaで、彼らは何の話をしたのか。彼らが太陽に関する話をしたであろうことは想像がつく。それがまた、Moby Dickとどのような関係で結びつくのか。Pequod号が沈んだ位置は、たんに赤道であったばかりではなく、地球上のもっとも東端にあたるところ、東経180°と赤道上の交わるあたりである。そこは、太陽の昇るところであり、また西経180°にあたるから、太陽の沈む場所である。Charles Feidelson編注の*Moby-Dick*にPequad号の航海地図が描かれているので、そ

れを参照すると、Melvilleがなぜ緯度0°、東経・西経180°をPequod号がMoby Dickと出会い沈んでいった場所に選んだか、その理由が容易に推測できる。この場所は、太陽が昇りまた沈むところ、つまり、天門、といえる場所である。Peterは、天門、地門、冥府の門のそれぞれの鍵を手に持ち、三つの門の番人をしているといわれている。ロンドンを中心と考えて、東経・西経0°と定めると、東のはずれ東経180°は、西のはずれ西経180°と同一地点になる。そこは、朝日と夕日の出入口ということになり、太陽の運行にあわせてPequed号がMoby Dickとともに現世を出て行く門としての意味をもつことになる。Don Pedroが使徒Peterを原型にしている理由が理解できる。Pequod号が沈んだ日は、太陽が海面下に沈み始める日、いいかえると、黄道が天の赤道と交わり赤道下にかくれる日、というと秋分の頃のMicheal Massの日、9月29日頃であると想像できる。

黄金亭でTown-Ho号について語り合った人々のうち、Don Sebastianという名の人が、Don Pedroとともに、Ishmaelにとって、他の人々より親しい間柄にあることになっている。

> For my humor's sake, I shall preserve the style in which I once narrated it at Lima, to a lounging circle of my Spanish friends, one saint's eve, smoking upon the thick-gilted tiled piazza of Golden Inn. Of those fine cavaliers, the young Dons, Padro and Sebastian were on the closer terms with me ; and hence the interluding questions they occasionally put, and which are duly answered at the time. (p. 322)

Sebastianという聖者は、体に矢が当っている姿で絵画に描かれている。その矢は、太陽の光芒のようにも、車輪のやのようにも、船の放射線状の舵輪のようにも見えないではないが、むしろ、キリストの横腹を突いた槍と相対するものであろう。それとも、Moby Dickの体に突きささっているもりを連想するべきだろうか。あるいは、これには、Town-Ho号の船底にどこからともなく浸水してくる穴が関連しているかもしれない。鯨の潮吹きや血液が吹上げるさまなども同じ範疇に入るだろう。Melvilleは、船内への水の流入を含めて、Town-Ho号の事件を、Inverted (p. 322) と云っている。この語は、潮吹きや血液が体外に吹き出すのにたいして、水が体内に、いいかえると船内に流入してくることも含めて、使われていると考えられる。Town-Ho号に水が入ってくる事件は、Pequod号の船内に水が入って最后に沈むことの予兆である。

> To some the general interest in the White Whale was now wildly heightened by a circumstance of the Town-Ho's story, which seemed obscurely to involve with the whale a certain wondrous, inverted visitation of one of those so called judgement of God which at times are said to overtake some men. (p. 322)

この文ではまた、Town-Ho号の事件を聞いて、Pequod号の船乗りたちの白鯨への関心が高まったと書かれているが、表面上は、Town-Ho号の事件と白鯨とはなんの関係もないよ

うに見える。しかし両者は大いに関係があるということを上の文は示唆している。すくなくとも、すでに述べたことから、Pequod号が沈んだ場所とTown-Ho号の事件が起った場所は、東経180°の赤道附近で、互いに近辺であることがわかる。SteelkiltとRadneyの事件も、Steelkiltが善なるものを象徴し、Radneyがその反対のものを代表するように描かれているから、キリストが世の罪を背負って殉難したことと同じ構図になっている。Town-Ho号と同じ場所でPequod号がMoby Dickと対決することになるが、そこには、罪と対決するという問題が含まれていることになる。わたくし自身の立場は、白鯨を悪とは見ていないで、Ahabが、内なる原罪を白鯨に投影させて、彼自身の罪と対決したのだという考え方をとっている。

Town-Ho号に水が入ってくる話には、生命、生殖、などが象徴されている。pequodという語はpea＋cod；pea＋pod；cod＝pod、豆のさや、つまりそれは、舟の型をしており、フロイトならそこに女性の生殖の器官を想像するだろう。白鯨が抹香鯨（Sperm whale）であるのが、ここで意味をもつようになる。その形状、吹き上げる一条の潮吹き、など、白鯨が男性の生殖力を象徴して用いられていることは、あきらかである。上の引用文で、白鯨とTown-Ho号事件が結びつけられているのは、このような理由によると考えられる。Moby DickとPequod号との終章の結末が、Town-Ho号の船内に水が入ってくることによって予兆されていると考えるべきだろう。

豆のさや、を意味するPequod号がspermという名の種族の白鯨によって、Essexという船がそうであったように、船腹に穴をあけられたのをどう解釈すればよいのか。その答えは、生命の誕生、豊穣、であろう。聖書の創世の物語では、最初に創造された生物は鯨であるし、神は鯨に、産めよ、増えよ、地に充てよ、と祝福しておられる、など、鯨は、生命の誕生の象徴である。このことから考えると、Pequod号が沈んでしまうのは、アイロニーになっているとも云えるし、またPequod号の人々が物質の世界から解脱して新しい生命を得る可能性があるのを両義的に示しているとも云える。

'*Town-Ho*'は、Tashtegoが聞いてきた話をIshmaelが又聞きでLimaのGolden Innで語るという形式になっている。Ishmaelは、彼自身が事件の経過をまったく見ていなかったにもかかわらず、その場に居あわせたかのように語っている。Pequod号の船内でもIshmaelは、すべてを知っている者として語っているので、'*Town-Ho*'でのIshmaelの語り手としのあり方が、他の章と比べてとくに違いがあるとは云えないが、ここでは又聞きの又聞きという二重・三重の額縁形式がとられていて、Ishmaelの、すべてを知る者、としての特徴が、ことさら鮮明に現れている。語り手と作者が混同されているという見方もあろうが、ここでは、Ishmaelの遍在性と不死性が強調されて、このような形式が意図的に用いられたものと考えたい。最終章でIshmaelは唯一人生き残ることになるが、それは、ヨブ記の形式を借りているばかりでなく、Ishmaelが、双子座のCastorとPolluxの兄弟のうち、不死身の

Polluxの特徴を性格原型として合せ持つからである。双子座は船乗りの守護者として知られている。これについては、"*Ramadan*"の章ですでに述べた。IshmaelがTown-Ho号についてGolden-Innで語り合ったときの、Ishmaelのスペイン人の友達のうち、一人はDon Pedro、もう一人はDon Sebastianであったが、この二人の名前が象徴するところについては、すでに述べた。Don Pedreは、Peter Coffinと同様、天国の鍵を持つ使徒Peterを原型にしており、Peterが魚を取る漁師であったこと、キリストによって任命されて人の魂を漁どる者となったこと、また、Melvilleが鯨を魚とみなしていること、ヨナの寓話がMapple神父によって語られるなど、Peterやヨナの象徴によって、『白鯨』には、キリスト教的救いの構図が織りこまれていると見て差し支えないだろう。

Steelkiltは五大湖沿岸のBuffalo地方の出身である。そのため彼は湖男(Lakeman)と呼ばれている。Ishmaelは、五大湖の説明を、物語の進行の途中で、さしはさんでいる。それは、湖に言及することがTown-Ho号の出来事を理解するのに必要であるからだろう。五大湖の湖とTown-Ho号の浸水の事件がパラレルの現象になっているように思われる。五大湖は世界最大の湖水地帯であるが、湖は、大地をかき分けて、地下から水が湧出して、それが溜ったもののような外見を呈している (fresh water seas of ours p. 324)。Town-Ho号の船底から入ってきた水が、普通の海水とは違っているふうに書かれているのは、そのあたりの海域の水が、まるで海底から湧き出した特殊な水であるかのように暗に示されていることになる。E. A. Poeの*A Narrative of Gordon Pimm*にも、南極に近づくにつれて海水が特殊な水に変わってきて、船がなだれ落ちる瀑布のような水流に引き込まれていく個所がある。

> At small brook which crossed our path … I am at a loss to give a distinct idea of the nature of this liquid, … Although it flowed with rapidity in all declivities where common water would do so, yet never, except when falling in a coscade, had it the customary appearence of limpidity. (p. 186)
>
> The phenomena of this water formed the first definite link in that vast chain of apparent miracles with which I was destined to be at length encircled. (p. 187)
>
> Through the middle of the valley ran a brawling stream of the same magical-looking water which has been described. (p. 189)

Melvilleも、あるいは、Town-Ho号に漏水が起ったあたりの海底に通路のようなものがあって、そこから特殊な水が湧き出ている、などといった想定をしているのかもしれない。このような想定は他の個所にも示されている。XLI章の'*Moby Dick*'の中で、Moby Dickは、地下の通路を通って、世界の海を自由に出没するのではないかと書かれている。その個所とTown-Ho号事件を関連づけてはいけないだろうか。地下の通路という概念は、'wild conceit' (p. 243〜4) として片づけられ婉曲に示されているが、『白鯨』の解釈にとって大

きな要素になる。沈んでいったPequod号と白鯨に牽かれたAhabがどこへいったかを想像するための根拠となるからである。次の文章がそれを示している。

> So that here, in the real living experience of living men, the prodigies related in old times of the inland Strello mountain in Portugal (near whose top there was said to be a lake in which the wrecks of ships floated up to the surface) and that still more wonderful story of the Arethusa fountain near Syracuse (whose waters were believed to have come from the Holy Land by underground passage) ; these fabulous narrations are almost fully equalled by the realities of the whalemen. (Feiddson p. 244)

湖に難波船の破片が見うけられたことがあったとか、またArethusaの泉の水源が聖地から来ているらしいという言及は、寓意としてあるいは喩え話として、『白鯨』の解釈と関わってくる。この湖がポルトガルのもっとも高い山Serra da Estrelaにあり、頂上周辺には多くの小さな湖があって、海から上がってきた船の破片の言い伝えは17世紀にさかのぼる(Feidelson注 p. 244)。Town-Ho号の物語をIshmaelはスペイン人の友人たちと語り合ったのだということを考えるとき、スペインあるいはポルトガルは、どちらもイベリア半島にあることがわかる。Arethusaの泉はシシリー島にあるが、この泉は、エルサレムからよりもスペインに距離が近い。MelvilleがHoly Landと云っているのは、エルサレムを指しているというより、スペインあたりの聖地、たとえば、スペインの守護者聖ヤコブ詣での聖地、コムポステラを指しているのではないだろうか。Arethusaの泉が地下の水脈によってスペインの聖地と結ばれているのではないかというMelvilleの想像は事実に反するであろうが、そういう想像を起こさせるようなArethusaの泉が存在するという事実が、『白鯨』の寓意として意味を持つのである。

*EXTRACTS*で、Melvilleは、スペインを喩えて、ヨーロッパの岸に打ち上げられた鯨であると云っている。

> "Spain-a great whale stranded on the shores of Europe." *Edmund Burke.*
>
> (*somewhere.*)

この文は、Edmund Burkeからの引用のように見せかけているだけで、Melvilleの創作だろう。*EXTRACTS*には出典の不明なものや事実と相違するものが多いが、*EXTRACTS*は、事実に反するかどうかが問題ではなく、『白鯨』の寓意を知るための鍵になるという意味で、置かれているのだ。伝説によると、聖ヤコブの頭部の入った石棺がコンポステラの浜に流れつき、そこに泉が湧き出たという。こうした水脈の通路を白鯨が往来するのではないかという想定が『白鯨』の寓意のかくれた部分を構成している。ヤコブは、天と地をつなぐ梯子を見た者であるが、また、12使徒の一人で、スペインの守護者になった聖者の名もヤコブである。ヤコブ聖者が往時のコンポステラ巡礼の風潮を起こした理由と結びつけて、Melvilleは白鯨伝説ともいえる一大寓話を作り出そうとしている。

Steelkiltが湖男と呼ばれるが、その理由は、次に述べることから理解できる。五大湖が地下の水脈とつながり、湖底に水の通路があるかもしれないこと、Town-Ho号の船底に穴があき、水が入ってきたこと、その水が真水のようであること、Arethusaの泉やStrello山の湖が地下の通路をもつこと、スペインのヤコブ聖者の復活の伝説など、は、一連のつながりがあることになる。Steelkiltという名の意味をSteelkilt＝Steel＋quilt；quilt＜thrashed or floggedと考えられないだろうか。Steelkiltは、flogしないでほしいと（p. 338)、船長にたびたび頼んでいる。steelから銛や槍は簡単に連想できる。Town-Ho号に穴があくこと、AhabのボートにMoby　Dickによって穴があくこと、Pequod号も同様になること、Steelkiltの名に、槍で刺し貫かれる、の意が感じられること、このことが、白鯨の噴泉、白鯨に銛が突き刺さることなどと、パラレルになっているらしいことがわかる。これらの一連の象徴は、Ahabが白鯨の先導によって地下の水路さぐり当て、そこから未知の世界へ行きたいという願望を示している。現実にそのようなものがあるとは考えられないが、これらのたとえは、すべて象徴言語であると解すべきであって、『白鯨』自体が永生願望の象徴であると考えるべきであろう。一度海底に潜って、ふたたび上にあがるという喩えは、ヨナの寓話の根本である。ヤコブの梯子の喩えも天へ上昇する道を示唆している。Pequod号が沈んだ位置は赤道上の経度180°あたり（Feidelson版、口絵の地図参照)、この地点は、すでに述べたように、使徒ペテロが守っているといわれている天門・地門・冥府門の位置にあたる。このことは、Ahabが、冥府行と復活にあづかったヨナの鯨の道を探究していることを示している。ユリシーズが金羊毛を求めたように、Ahabは幻想の海に漂う白い鯨を求めたのである。

Steelkiltという名に、槍で突く、の意がうかがえるといったが、Melvilleにとって、銛とか矢などは、以上に述べたような特別の象徴的な意味をもっているだろう。Melvilleは、『白鯨』や『ピュール』を執筆した当時も、その後も住んでいた家をArrowhead（矢じり）と名づけていた。またMelvilleはこの家の中に今も保存されている大きな煙突について*'I and My Chimney'*の中で特別の思いをこめて語っているが、煙突、も、槍、と同様の象徴的意味をもつ。Iという字は、柱、槍、天に向けられて立つ矢、などを表象する記号というふうに視覚的にとらえることができる。煙突もまた大きなIの字にみえる。*'I　and　My Chimney'*という表題は、IつまりMelvilleとArrowheadの建物の煙突が、Identity互換の関係にあって、互いに並んで立っているように見える。*'I and My Chimney'*が象徴するものは、『白鯨』の意味と大いに関係がある。Steelkiltの名が、槍に突かれて、下降、死、などを意味として含む一方、Town-Ho号の挿話には、ニューヨークの大運河(Grand Canal)地方出身の運河男（Canalers）や湖男（Lakeman, Steelkiltのこと）など、水路が問題になっている。

"Moby Dick"

第XLI章では、Moby Dickのもつ特質と、AhabがMoby Dick狩りに執心するようになる経過とが語られている。

まず、Moby Dickの特異さを挙げてみると、

> one of the wild suggestings referred to, as at last coming to be linked with the White Whale in the minds of the superstitiously inclined, was the unearthly conceit that Moby Dick was ubiquitous; that he had actually been encountered in opposite latitudes at one and the same instant of time. (p. 243)

Moby Dickが偏在（ubiquitous）であると想像されていることである。その理由として、つぎのような憶測がある。

> Nor, credulous as such minds must have been, was this conceit altogether without some faint show of superstitious probability. For as the secrets of the currents in the seas have never yet been divulged, even to the most erudite research; so the hidden ways of the Sperm Whale when beneath the surface remain, in great part, unaccountable to his pursuers; and from time to time have originated the most curious and contradictory speculations regarding them, especially concerning the mystic mode whereby, after sounding to a great depth, he transports himself with such vast swiftness to the most widely distant places. (p. 243-4)

知られていない秘密の海流のようなものがあって、深いところにあるそのような道を抹香鯨が知っており、それをMoby Dickが自由に行き来するのだろう、と云う。たしかに、抹香鯨は、鯨の中でも、もっとも深く潜ることができると云われている。抹香鯨は、この特色のために、ヨナの鯨であっただろうと思われる。もっとも深く堕ちた者がもっとも高く挙げられるというキリスト教の論理、felix culpa、の象徴として、抹香鯨がもっともふさわしいからである。北極の海を通って大西洋から太平洋に出る道、いわゆるNorth West Passageは、秘密の通路を知っている抹香鯨にとっては、いとも容易な道であろう、と述べられている。その根拠とされるのは、ポルトガルのStrello山の頂上近くの湖で難破船の破片が発見されるなど、おそらく、SyracuseのArethusaの泉のような、地下の水脈があって、その水洞の中を抹香鯨がひそかに通行しているのではなかろうか、という説である。地下の水脈といういう考えは、しばしば暗示されており、この作品の知られざるモティーフとなっている。

> Hence, by inference, it has been believed by some whalemen, that the North West Passage, so long a problem to man, was never a problem to the whale. So that here, in the real living experience of living men, the prodigies related in old times of the inland Strello mountain in Portugal (near whose top there was said to be a lake in which the

wrecks of ships floated up to the surface) ; and that still more wonderful story of Arethusa fountain near Syracuse (whose waters were believed to have come from the Holy Land by an underground passage) ; these fabulous narrations are almost fully equalled by the realities of the whaleman. (p. 244)

'*Jonah Historically Regarded*'の章では、ヨナを飲んだ鯨が、地中海の西のはずれのJappaから、あるいは地中海の東のはずれからであろうと、アフリカ大陸を一周し、アラビア海を通り、Tigris河畔にあるNinevehまで、三日間で航行できたのはなぜか、という疑問が示されている。また、'*Town-Ho's Story*'の章では、船底から真水が浸出するという奇跡が起る。その章では、湖男 (Lakeman) のSteelkiltと仲間の運河男達 (Canallers) が航海士のRadneyと対決する事件がある。この劇中劇は、晩年の作品である*Billy Budd*の原型である。Steelkiltは五大湖の出身であるために湖男と呼ばれており、キリスト像の重複するBillyの原型である。

この章の冒頭の、Ishmaelの雄叫びは、たしかに、一見Ishmaelの唐突な興奮ぶりを示しているようにみえる。

I, Ishmael, was one of that crew ; my shouts had gone up with the rest ; my oath had been welded with theirs ; and stronger I shouted, and more did I hammer and clinch my oath, because of the dread in my soul. A wild, mystical, sympathetical feeling was in me; Ahab's quenchless feud seemed mine. With greedy ears I learned the history of that murderous monster against whom I and all the others had taken oaths of violence and revenge. (p. 239)

しかし、この文は、Ishmaelがするどい霊的感応力をそなえているので、そのために、Ishmaelの感応力が他の者たちの興奮に共鳴し振動を起こしているのだ、と解釈してもよいだろう。'A wild, mystical, sympathetical feeling was in me ; Ahab's quenchless feuds seemed mine.' は、そのように解釈すべきだろう。上記の引用文は、前章の'*Midnight, Forecastle*'の乱痴気騒ぎを承けて書き始められた文章であり、前章と当章を繋ぐものであるから、とりたててIshmaelの陶酔状態を示したものとは云えない。しかし、当章の、'*Moby Dick*'という主題からは、上の冒頭の文は、いささか、唐突の印象を与えないでもないが、'With greedy ears I learned the history of that murderous monster'のような取り乱した文がMoby Dickの非現実的な側面を説明するための前段階として必要だと考慮されたために、このような冒頭の文が置かれたのだろう。'the dread in my soul'はMoby Dickにたいする恐れもあろうが、Pequod号や仲間たちの運命を予知して、それにたいするIshmaelの恐れの念でもあろう。

'*Moby Dick*'では、白鯨の特異性について、および白鯨とAhabとの関わりについて、語られている。それを語るIshmael自身も白鯨に対して不思議な関わり方をしている。まず、

IshmaelがAhabとまったく同じ激情をおぼえて、Ahabと心を一つにすることである。第Ⅰ章でIshmaelは、なぜ彼が白鯨を探究する旅に出るかを説き起すが、彼の述べる理由は、とりとめがなく、合理的な説明とは云いがたい。磁石に吸い寄せられるように水に魅了されるということと、潜在意識の中で白鯨らしいものの幻を見たことがその理由である。これらの理由を述べるIshmaelの心理状態は、正常な覚めた状態とは云いがたい。彼は、混沌と陶酔の中にいる。彼は、長い眠りから覚めたばかりのような茫漠たる精神状態の中にいる。第Ⅰ章では、Ishmaelは、彼の巫女的特性を露わに示している。第Ⅱ章以后は、彼は、秩序、理性、客観性、明晰さをそなえ、その語り方は、第Ⅰ章の語り方と違っている。'*Moby Dick*'の章の冒頭でふたたび第Ⅰ章の語り手と同じIshmaelが顔でのぞかせる。Ishmaelは、白鯨に対してAhabと同じ心になる、と云って興奮を示す。他の船乗りたちもIshmealと同様、Ahabの気持ちに引きずられている。このことは、単に、Ahabの扇動者としての能力が優れているとばかりは云えない。Ahabをはじめ、Pequod号のすべての乗船者が運命の導く力を感じとって、一時的にせよ、いわばspiritual mediumになって、一つの心になった、ということも考えられる。第Ⅰ章の、Ishmaelの語り方は、見えない力の導きに反応している人のそれである。第Ⅰ章では、運命の車輪の始動に合せて、Ishmaelという物語の精神が今、混沌の中から目を覚ますところである、といったような巫女的な特性をIshmaelは示したが、この巫女性こそIshmaelのもっとも大きな特性である。Ishmaelは、普遍性と自己を同一化することができ、普遍性と自己との間に境界線を持たぬいわば、自己を持たぬ人物である。彼は、spiritual mediumであり、予言者である。そのため、過去も現在も未来も見透すことができ、時空を超えた普遍者である。普遍者と一体になることができれば、Ishmaelが人の心の中に入って行き、そこにあるものを見て、それを語るなどたやすいことである。そのように考えれば、Ishmaelの、この作品での役割の重要さが、矛盾なく理解できる。Ishmaelが客観性を失ったかに見えてAhabの同一性を自己のものとしても、矛盾ではなくなる。AhabにもましてIshmaelがまず白鯨探究の第一歩を踏み出したのであるから。上記の第XLI章の冒頭の文を見てみよう。

the dread in my soulは、さまざまに解釈できる。Ishmaelの心にある白鯨の幻と、噂にきく実際の白鯨が、一致し合うことへの畏怖や、Ishmaelを含めて、Ahabや他の人々を動かす運命の力、その中心に白鯨がいることへの畏怖、などをIshmaelはdread in meと云ったのではないか。Ishmaelは高感度な受信機のような感応力をそなえている。彼は、宇宙の意思というべきものを感じとるので、予言者の資質をもっている。いずれ述べることになるが、Ishmaelは「ヨブ記」に出てくる若者Elihuとよく似た人物である。ヨブと長老たちが、神の意図について論争したが、結局彼らには何もわからなかった。どこからともなく現われたElihuが、もっとも適確に神の言葉を代弁し、神もそれをよしとされる。あのElihuとIshmaelは、共通した資質と役柄をもっている。Ahabが初めて白鯨に出会い、片足を失

ったために気もくるわんばかりになったが、このことにも同様の理由が考えられる。率直に云って、Ahabは神憑りになったのではないか。IshmaelはAhabの深層心理の中へ、また過去の中へ入っていって、Ahabが白鯨に対して執念を燃す理由を分析しているが、第XIX章の'*Prophet*'でElijahもAhabの未来について見透している。Ahabが片足を失ったときの航海に、Elijahも同じ船に乗っていて、Ahabのその後の状態を見ていた。Elijahは熱い湯煙のような、白鯨の吹き上げる潮をあびて、顔じゅうに、月の表面のような痕が残っている。そのためか、Eliahは、月の女神ヘカテのように予言ができる。Elijahも白鯨のために片腕を失っている。このように見ていくと、白鯨に出合うと、なんらかの現世を超えた予知能力を得るらしく、Ahabが羅針儀をはじめ計測器を捨てていくのも、彼には、いつ、どこで白鯨と対決できるか、どのようにしてその場所へ導かれていくか、などについて確信があったからではないか。そのような予知力をAhabは、片足を失ったときに得たのではないだろうか。'*Moby Dick*'の章と'*The Prophet*'の章のAhabを較べてみると、白鯨との最初の出会いのときに、Ahabの自由な意志のあずかり知らぬところで、すでに最終段階の対決が準備されていたと考えられる。Ahabをはじめ、Pequod号に乗った者たちは、この劇を準備した宿命の力によって、はじめから選ばれていたと考えるべきだろう。彼等はそれぞれ選ばれるにたる資格があったと考えるべきだろう。十二使徒が、偶然に選ばれたように見えて、実際には、彼らが知らないうちに、まえもって彼らは選ばれていた、という考え方で、『白鯨』の中の登場人物すべてを眺める必要がある。『白鯨』の人物構成は緊密であり、偶然の出会いのように見えても、無駄な人物がまったく見あたらない。人物の名前も地名も船名も、作品の解釈に不可欠な意味と寓意にみちている。それらはすべて、一つの同じ的を射ている。登場人物の一人一人がもつ象徴的意味はすべて、Pequod号が沈んで行ったときの海面の渦のまわりをまわって、その渦の中心に収れんする。そのように、必然の糸がドラマを動かしているというふうに描くのがMelvilleの意図であったと思われる。

"Hark"

Cの文字が"*Hark*"の章でひんぱんに使われている理由として、つぎのように考えられる。記号としてのCは、月の姿の一つである三日月の形をしている。これは豊穣のつのと呼ばれ、多産を司どるとされている。"*Hark*"では、月夜の晩に男たちが水を甲板上の樽に移し入れている。おそらく満月の夜（a fair moonlight p. 265）だろう。ところで、三日月が豊穣の象徴であるとされるのは、月に太陽の影が重なって、ちょうど女性の象徴である月の中へ、男性の象徴である太陽が入って、三日月の現象が交合のかたちに見えるためである。甲板に置かれた樽には、満月の月が映っていることだろう。その映った月に向って桶の水を注ぎいれている行為は、やはり、生命が生み出されるのを祈念する祭祀的な意味をもつ。

*Moby-Dick*にえがかれている自然現象は、いつも象徴としての意味をもつものであるから、単純に、自然の情景描写として、とらえるべきではない。むしろ、宇宙の言語は象徴である、とMelvilleが主張しているものと受けとめて、そのメッセージを解読していくべきだろう。

'The Prophet'

Elijahの顔には、天然痘の痕がある。これは、ありきたりの跡形ではない。Elijahの顔には、奔流が川底を削り取ったあとのような複雑な線が走っている。それも飛び散ったように四方八方に走っている。煮えたぎる湯の飛沫を浴びた痕のように見える。そのようにテキストにはえがかれている。それは月面のあばた面に見えなくもない。

> A confluent small-pox had in all directions flowed over his face and left it like the complicated ribbed bed of a torrent, when the rushing waters have been dried up.
> (p. 132)

この文と第LXXXV章の*'The Fountain'*のつぎの文とを比較すると両者のあいだには共通するものがあるのが感じられる。

> For ever when coming into slight contact with the outer, vapory shreds of the jet, which will often happen, your skin will feverishly smart, from the acridness of the thing so touching it. And I know one, who coming into still closer contact with the spout, whether with some scientific object in view, or ortherwise, I cannot say, the skin peeled off from his cheek and arm. Therefore, among whalemen, the spout is deemed poisonous ; (p. 479)

白鯨の汐吹きの水煙にちよっとでも触れると塩気のために皮膚はひりひりと熱く傷むことになり、頬や腕に汐吹きをかぶろうものなら皮がむけてしまうので、水夫たちは汐吹きを有毒であるとみなしている、と述べられている。Elijahは、Ahabが白鯨に片足をうばわれたときにおそらくその場に居合せたのだろう。Elijahもおそらく白鯨の汐吹きを浴びたのだろう。Melvilleは、白鯨の汐吹きは他の抹香鯨のものとはことなると云いたいのであろう。Elijahの顔の痕かたは、small-poxによるものではなく、むしろ白鯨の汐吹きによるものであることが暗示されている。

Elijahは顔ばかりではなく腕にも損傷を負っているらしい。つぎの文から、そのことがうかがわれる。

> "Look ye ; when captain Ahab is all right, then this left arm of mine will be all right, not before." (p. 135)

Elijahの腕とAhabの脚はどちらも白鯨にによって傷を受けたのではないだろうか。Elijahの片方の腕はぎこちない動きをするので、ことによると、これは義手かもしれない。彼は

腕の関節を曲げないでPequod号を指さす。

> "Aye, the Pequod——that ship there," he said, drawing back his whole arm, and then rapidly shoving it straight out from him, with the fixed bayonet of his pointed finger darted full at the object. (p. 132)

Elijahは、腕全体をうしろに引き、それを真っすぐに根元から前方に繰り出し、狙いを定めて銃剣のように指をつきつけて、と書かれているが、このことは、Elijahの腕について比喩的に形容されているというより、腕そのものが棒のような人工のものであるという印象を与える。Elijahの人差し指がかさばっている（massive forefinger）（p. 134）とことわっていることも、彼の腕が義手であるらしいことを裏づけるといえるだろう。第XXI章"*Going Aboard*"でElijahがたびたびIshmaelやQueequegの肩に手を乗せるが（p. 139、140）、それもElijahの手が印象づけられているわけで、Ahabの足とElijahの手が白鯨によって不具になったことを示している。これは第C章"*The Pequod Meets the Samuel Enderby*"の船長が鯨骨の腕をしていたこととアナロジーになっている。白鯨の汐吹きを浴びることや、白鯨によって不具になることなどは、ある意味では聖痕と考えられる。Elijahのばあい、聖痕を受けることによって彼は予言能力を授かったのだろう。Ahabについても同じことがいえる。AhabはCape Horn沖を通過したとき以来、人間が一変してしまった、とElijahはいう。また、Cape Hornを通過したときAhabが三日三晩死んだようになったと、Elijahはいう。Pequod号は、Elijahが乗り合わせた前回の航海とは違ってCape Hornを航海するわけではない。Pequod号はCape Hornの東側、大西洋側のRio de la Plataの近くを通り、Cape of Good Hopeを通過することになる。このあたりでPequod号は白鯨の汐吹きを見かけることになる。これがPequod号が白鯨の影を見た最初である。こういったElijahの言及はCape Horn沖やCape of Good Hope沖と白鯨とのあいだになにか神秘的なつながりがあるように感じさせる。Elijahは、Pequod号の運命を予知しているばかりでなく、物語全体の因果関係や必然性などを把握していて、この白鯨物語の意味を解く鍵をIshmaelに与えているようである。IshmaelがElijahのそうした特質に気づいていないはずがないにもかかわらず、Ishmaelは徹底してElijahを理解していないようにふるまう。Elijahが、白鯨の汐吹きを浴びたことによって、また腕が白鯨のために不具になったことによって予知能力を得たと考えられるなら、これらの身体の損傷は聖痕であるらしいという考え方を導くことができる。AhabはCape Hornを通過したり片足を失うことによって、神秘的な洞察力や感応力を身につけたものと考えられる。Cape Hornを通過する経験がある種の神秘の世界へのイニシエィションになるであろうとは考えられないことではない。

Ahabが不可視のものを知覚する能力をそなえていることをElijahはIshmaelにつぎのようにほのめかして云う。

> "Yes," said I, "we have just signed the articles."

"Anything down there about your souls?" "About what?"

"Oh, perhaps you havn't got any," he said quickly. "No matter though, I know many chaps that havn't got any,——good luck to 'em; and they are all the better off for it. A soul's a sort of a fifth wheel to a wagon."

"What are you jabbering about, shipmate?" said I.

"He's got enough, though, to make up for all deficiencies of that sort in other chaps," abruptly said the stranger, placing a nervous emphasis upon the word he. (p. 132〜3)

Ishmaelが、契約に署名した、というとElijahは、魂に関する儀式として契約を結んだのかと問い返す。Ishmaelは"About what ?"と聞き返すが、この"About what ?"は、読者にElijahの問いに注意を払うようにさせるための手法であると受け取ればよいだろう。Ishmaelがここで無邪気さをよそおうのでElijahの言葉の真の意味がすり抜けてしまい、読者を当惑させはするが、Elijahの言葉は取るに足りない内容であるような印象を読者に与える。Elijahは魂を問題にしていて、彼は、Ahabが他の水夫たちの魂の不足を補って余るほどの魂をもっているという。魂を有することは永遠の生命をうるための必要条件であるが、他の水夫たちが魂を持ち合せていなくともAhabの手足となってAhabの一部になるとき、彼らもAhabの悲劇と栄光にあずかることになる。もしAhabが永遠の生命を得るなら、彼らもそれにあずかることができるだろう。Elijahは、魂とは荷車の第五番目の車輪のようなものであると云っている。聖書の中のElijahは、聖書の中のAhabと大きく関わり、子供をよみがえらせたりしている。彼は、天から迎えに来た馬車にのって昇天し、変容にあずかったと伝えられている。また、復活にあずかり、生死の行末を予言した。MelvilleのAhab物語になぜElijahという名の予言者が配されているのだろうか。Ahabの悲劇的な最後を予兆する伏線としてのみ、Elijahが登場するのではないだろう。聖書のAhabは、背信のアダムと同格である。そのアダムがどん底から復楽園を成し遂げる可能性があるのでは、というのが、作品『白鯨』執筆の目的ではないかと思われる。もっとも深い絶望の中から、もっとも大きな希望が生じるのであり、Ahabの大きな苦悩が、彼の一途な探究心を支えている。Ahabの求めているのは、生命の神秘である。白鯨は、善と悪を包み、それらを超越した神の力を秘めたもの、Melvilleの云う生命の象徴 phantom of lifeである。Elijahが登場するのは、悲劇を越えてAhabの復楽園を導くためであろう。

'The Lee Shore'

第XXIII章'*The Lee Shore*'の、23という章数は、詩篇の第23章と比較対照して考慮されるべきである。詩篇第23章をまず引用しよう。

1 The Lord is my shepherd; I shall not want.

2 He maketh me to lie down in green pastures: he leadeth me beside the still waters.

3 He restoreth my soul :
he leadeth me in the paths of righteousness for his name's sake.

4 Yea, though I walk through the valley of the shadow of death, I will fear no evil ;
for thou art with me ; thy rod and thy staff they comfort me.

5 Thou preparest a table before me in the presence of mine enemies : thou anointest
my head with oil ; my cup runneth over.

6 Surely goodness and mercy shall follow me all the days of my life : and I will dwell
in the house of the Lord for ever. (kjv)

ここで語られているやすらぎの状態は、二様に解釈できるのは云うまでもない。それは、この世でのやすらぎの状態と、彼岸のそれとである。'*The Lee Shore*'の*Bulkington*は、彼自身の意志でこの世を去っており、それは、すでに述べたように、Pequod号を彼岸の'the house of the Lord'に導くためのさきがけとしてである。詩篇23章は通常とむらいのための頌歌として用いられており、神が人の魂を導いて下さるとの確信をうたったものである。洗礼者のヨハネがイエスのさきがけとして存在したように、BulkingtonもAhabのさきがけとして、この世を離れると考えてよいだろう。詩篇が彼岸での救いを保証しているのが、Ahabの彼岸での行末をも暗に保証しているように感じられる。詩篇第23章と*Moby-Dick*の第XXIII章は、ちょうど二本の撚り糸strandを撚り合せて一本の綱cableを作るように、たがいに撚り合せられていると考えるべきだろう。

この、撚り糸、の比喩は、第IX章'*The Sermon*'でMapple神父が、ヨナの寓話を形容して、用いている。それは、つぎのとうりである。

> Shipmates, this book, containing only four chapters——four yarns——is one of the smallest strands in the mighty cable of the Scriptures. (p. 71)

'*The Lee Shore*'の章と詩篇23章の例にかぎらず、ふたつのものがひとつに撚り合されるという比喩が、*Moby-Dick*にみちあふれている。いいかえれば、*Moby-Dick*の構図そのものが、撚り糸の比喩と、これも第VIII章'*The Pulpit*'でMapple神父の風貌について描写されるところの、接ぎ穂、の比喩とから成っているとすら云うことができる。Mapple神父には、どこか接ぎ穂されたような感じがある。there were certain engrafted peculialities about him. (p. 67)

接ぎ穂とは、たとえば、Mapple神父の名のMappleは、mapleとappleから成っている、など、一度伐られた樹が接木されてふたたび芽をふく、という概念である。Ahabの脚は一度切断されて、そこの鯨骨が、いわば接木された状態になっている。Ahabに接ぎ穂された鯨骨がどのように芽吹くのか、といった語られていない部分、推測にまかされている部分、が、*Moby-Dick*を解釈するための鍵となる。Pequod号上で舵をとるBulkingtonの姿は、すでに肉体を捨てた幻の身であり、それをIshmaelの心眼がとらえたものである。Bulkington

の魂が彼岸で芽吹くのを、他方の撚り糸としての詩篇の23章が暗に示していると考えるのでなければ、つぎの、*'The Lee Shore'*の章末の一節があまりに唐突すぎて理解できないことになる。

> But as in landlessness alone resides the highest truth, shoreless, indefinite as God——so, better is it to perish in that howling infinite, than be inglorious dashed upon the lee, even if that were safety! For worm-like, then, oh! who would craven crawl to land! Terrors of the terrifle; is all this agony so vain? Take heart, take heart, O Bulkington! Bear thee grimly, demigod! Up from the spray of thy ocean-perishing——straight up, leaps thy apotheosis! (p. 149)

人が神格と永遠の生命を得るためには、まず現世の生命を捨てることが前提である、という主張がこの文にはみられる。lee shoreのleeが、風下、の意と、同時に、おりかす、残滓、の意をふくんでいるのが感じられる。

'Queen Mab'

第XXXI章の*'Queen Mab'*を解釈するためには、フロイトの潜在意識の概念を取り入れると理解しやすい。Queen Mabというのは、英国の伝説の妖精の女王の名である。のちにTitaniaであるとされ、人々が眠っているときに、夢の仲立ちをするといわれている。

*'Queen Mab'*では、Stubbが前夜見たとりとめのない夢について語られている。Stubbは何回も、'wise Stubb'という。この言葉は、何回も反復して聞かされると、おそらく'Stubb wise'と聞えるだろう。そうすると、Stubbのように、の意になる。Stubbという名は、切株stub切株の意をふくんでいる。『白鯨』の登場人物、地名、人物はすべて象徴としての意味をもっている。stubという語の意味は、さまざま考えられる中で、一つは、陽根の意だろう。stubbは夢の中で、うしろ姿のAhabを何回となく足で蹴るが、これは、おそらく意識下の幻想では、性行為を意味するだろう。

Stubb自身のもつイメージは、明るく大らかな性そのものである。彼は善悪を論じない。Stubbにとっては、瞬間々々の現在があるばかりで、過去も未来も彼は気にしない。Pequad号の上級船員は、太陽のまわりを回る惑星にたとえられている。太陽は、いうまでもなく、Ahabである。Starbuckは、太陽にもっとも近い惑星である水星として、Stubbは、次に太陽に近い金星として、そしてFlaskはそれに続く惑星である地球として、それぞれ太陽であるAhabに従っている。Starbuckの名には、星の男、の意がある。彼は水銀のように鋭敏で、影響を受けやすい。金星としてのStubbは、Venusの支配する性愛の星である。Stubbは、stub、つまり、切株、棒杭、などの意をもっている。Flaskは、水を入れる容器、ガラス鉢、など、水球としての地球のイメージをもつ。Flaskは、彼自身の意見をもたず、完全な受容の姿勢を保つ。彼は水の性質をもっている。Stubbが性愛の星ビーナスをあらわすな

ら、彼が見た夢の中の行為の意味はあきらかである。彼は、潜在意識内でのリビドー幻想について語っていることになる。『白鯨』では、表面下のかくれたレベルで、性について語られるばあいが多い。*'Queen Mab'*もそうである。

Flaskは、背が低くずんぐりしているので、King PostとStubbから呼ばれている。King Postとは、建築の用語で、真束といい、建物の屋根を支える大切な部位である。FlaskがKing Postと愛称されているのは、彼が小柄であっても、重要な役割をもつ屋台柱であることを示唆している。

'The Carpet-Bag'

Melvilleが*'The Carpet-Bag'*という表題の章を設けた理由について考えられるのは、『白鯨』の多くの章で見受けられるように、使徒ヤコブ像とその象徴とされる持ち物がcarpet-bagという語と関わっているためであろう。carpet-bagつまり、旅行用の身の回りの物を入れる袋、とは、中世において、スペインへヤコブ巡礼のために、多くの人々を駆りたてたあの巡礼行に使われた持ち物である巡礼袋としての意味を持っているのではないか。ヤコブ巡礼と白鯨探究の旅とが、重複しあって同義的にえがかれているのではないか。捕鯨のための銛が、巡礼杖としての意味を持っていると考えられる。

'The Praire'

LXXIX章の特色は、大草原prairieの綴りがまちがって綴られていることである。iの文字が脱落しているが、これには意図がある。前章からひきつづいて、抹香鯨の頭部および前面が思索の対象として観察されている。人体を小宇宙とみたてて大宇宙と対比させ、そこにパラレル関係が存在するという考え方は古くからあった。Melvilleは、形状とその形状が象徴する概念とは相関々係にあるという考えをしばしば表明している。Melvilleは可視の現象と不可視の精神とは、形状という媒体を介して不可分の関係にあるという考えをもっており、この章はその考え方を押し進めたものといえる。形を観察することによって、それのもつ不可視の部分を類推することができるという考え方である。それは人相学・観相術（physiognomy）とか骨相学（phrenology）などといわれるものであるが、Ishmaelは、これを鯨に当てはめて、今まで人が試みたことがないものといっている。

> To scan the lines of his face, or feel the bumps on the head of this Leviathan ; this is a thing which no Physiognomist or Phrenologist has as yet undertaken. (p. 445)

抹香鯨の顔の異質さは、鼻がないことである。その顔の正面には、こまかなしわ以外なにもない。それは、風景にたとえると、大平原に見える。顔をみはるかす風景にたとえると鼻はその風景の中心の特色となる尖塔のようなものだ、とIshmaelはいう。

> For as in landscape gardening, a spire, cupola, monument, or tower of some sort, is

deemed almost indispensable to the completion of the scene; so no face can be physiognomically in keeping without the elevated open-work belfry of the nose.

(p. 446)

この文から、なぜMelvilleが大平原をpraireと綴ってiの文字を脱落させたか、その理由を推しはかることができないだろうか。Melvilleは鼻柱と塔のような高いものとがパラレルの関係にあるとみなしている。人や動物の顔と風景はパラレルの関係にあって、また顔や風景の特色がそれらの内面の特色を表しているばかりでなく、Melvilleはその考え方をさらに拡大させて、文字や語もなんらかの概念を視覚的に表現できる象形文字としての機能をもっていると考えているようである。顔や風景ばかりではなく、文字や語も形あるものとしてとらえ、視覚に映るものはすべて、それらに内在するある概念を無言のうちに明らかに示しているという考えである。小文字のiであれ大文字のIであれ、この字は、高くそびえたつもの、の象形であると考えれば、さまざまなかくされた意味が見えてくる。そして、この章でMelvilleが解くようにと読者の前にさし出した問いの意味が明らかになってくる。iの字が抜けているpraireという語は、鼻も目もない、大平原のような、正面から見た、のっぺりした鯨の顔をあらわしていることになる。こうしたとらえ方をすると、Melvilleのえがく自然には象徴が充満している。Mevilleにはフロイトと共通するところが多分にある。

Ishmaelは、抹香鯨の大平原のような頭部の前面を読者の前に置く。そしてそれを解読せよと問いかける。

Champollion deciphered the wrinkled granite hieroglyphics. But there is no Champollion to decipher the Egypt of every man's and every being's face. Physiognomy, like every other human existence, is but a passing fable. If then, Sir William Jones, who read in thirty languages, could not read the simplest peasant's face in its profounder and more subtler meanings, how many unlettered Ishmael hope to read the awful Chaldee of the Sperm Whale's brow? I but put that brow before you. Read it if you can. (p. 449)

Ishmaelは、抹香鯨の額、という謎を解けるなら解いてみよ、と読者にせまる。この謎が解けなければ白鯨の意味がわからないことになる。かつてスフィンクスが旅人に謎をかけて、それが解けなければ人は前に進むことができなかったという伝説と同じ形式をMelvilleはもちいている。physiognomy（骨相）とphrenology（人相）の両面から捉えるようにとMelvilleはすすめている。phrenologyは表面を、physiognomyは内部を見る。*'The Praire'*の章では抹香鯨の表面を、次章の*'The Nut'*ではその内部をとらえようとしている。phrenologyは、外形はその内面の本質が形にあらわされたものであるという考え方にもとずいている。外面と内面は表裏一体であるという考え方は、超絶主義と同じである。ここには、言葉による表現や説明は二義的な手段であって、言葉は外的な事物や事柄の可視的な部分を説明すればよく、それによって本質的な不可視の部分はおのずから語られているという

考え方がある。Melvilleはしばしば沈黙は重要だを説いているが、それはこのような超絶主義の考え方にもとずいているためである。Melvilleにとっては、超絶主義は、経験という媒介を必要としないばかりでなく、言葉による説明も必要がなく、外形のイメージを提示するだけで説明はおのずから語られている、という考え方になる。これはフロイトが、夢の言語はイメージであって言葉ではない、と考えたのと同じ発想になる。ヘミングウェイが言葉を外面の描写に限定し内面の描写を極力省いた手法と共通するところがある。*'The Praire'*の章でMelvilleは、抹香鯨の頭を読者の前に据え、この外形が象徴する深い意味(its profounder and more subtle meanings) を解いてみよと読者に問う。

抹香鯨にとって顔の正面になにもなく空白であるのはなんら不足とは云えず荘厳ですらある、とIshmaelはいう。

> Nevertheless, Leviathan is of so mighty a magnitude, all his proportions are so stately, that the same deficiency (the lack of the nose) which in the sculptured Jove were hideous, in him is no blemish at all. Nay, it is an added grandeur. A nose to the whale would have been impertinent. (P. 446)

顔の正面が空白でなにもない、ということが、とりもなおさず、姿かたちをもたぬ神の表象である、というふうに理解するべきなのだろう。顔の表面に欠落しているところの、鼻、つまり、自己あるいはidentity、の象徴であるiの文字が、じつは、鯨の体内で、ロザリオのようにつらなった骨格がiの文字の形を形成している、つまり、鯨は顔のおもてに現われているiの文字が体内に内蔵されている。そのことが次章の*'The Nut'*で説かれている。prairieの綴りからiの文字が欠落して綴られているのは、上に述べた理由にもとづいていると理解すべきだろう。

'Nightgown'

第XI章*'Nightgown'*「夜着」、では、寒さの中のささやかな暖かさ、あるいは、夜闇の中の小さな光、の重要さが説かれている。Melvilleは、しばしば、服装について言及している。彼は、とくにQueequegが衣服を着替えるところをたびたび描写している。たとえば、第XIII章の*'Wheelbarrow'*で、Queequegは乾いた服に着替える、he put on dry clothes, lighted his pipe (p. 95-96)、など、また、第IX章の*'The Counterpane'*で、Queequegの朝の着替えがくわしくえがかれているが、彼の着替えるときの姿を見て、Ishmaelは、Queequegは変貌の過渡期にある、Queequeg, do you see, was a creature in the transition state—neither caterpillar nor butterfly. (p. 55) という。

*'Nightgown'*の章と前後して、このように、Queequegが服を着かえる行為が、魂の発達段階を区分するような、象徴としての意味をもっているのが感じとれる。*'Counterpane'*や*'Nightgown'*の語義は、身体をすっぽり覆うもの、として共通している。白鯨の白さのよう

な、あるいは、山上のイエス・キリスト（マタイ17：2～8）のような、光り輝く白い衣をまとうのが、変容の最終段階と云えるだろう。*'Nightgown'*では、IshmaelとQueequegが星座の双子座に喩えられているのが、わずかに感じとれる。*'Ramadan'*の章でも、彼らが双子座のPolluxとCastorであるかのように示唆されている。

IshmaelとQueequegは、足をからませたりして、仲良く横になっている。その姿は、まるで、双子座のようである。次の文では、

> We had lain thus in bed, chatting and napping at short intervals, and Queequeg now and then affectionately throwing his brown tattooed legs over mine, and then drawing them back ; so entirely sociable and free and easy were we ; when, at last, by reason of our confabulations, what little nappiness remained in us altogether departed, and we felt like getting up again, though daybreak was yet some way down the future. (p. 86)

confabulationは、談笑する、の意で使われているが、本来この語は、作語する、fableを作る、などの意をもつから、たんに、談笑する、の意だけで使われていると考えるべきでない。すでに見てきたように、Melvilleの用語の難しさは、ひとつの語が、表面上の意味とは違ったかくされた意味を秘めているばあいが多いからである。confabulationにも同じことが云える。この語には、IshmaelとQueequgが神話を作る、の意が入っていると云えるのではないか。多くの章からさまざまな例を引いてくるのでなければ、説得力がないのは云うまでもないが、それは各章で述べることにして、ここでは、*'Nightgown'*の章では、船乗りの守護神としての双子座を、IshmaelとQueequegが象徴していると指摘するにとどめたい。*Moby-Dick*という作品の、とくに最初の数章では、前後関係の指摘をしても説得性に欠けるのは否めない。

day-break was yet some way down the futureとあるが、ここで云われている、夜明け、は、この作品の*'Epiloque'*でIshmaelが一人海上を漂うときの、あの静けさと平和の状態が現れるまで待たなければならない。confabulationとは、神話としての白鯨探究の旅をさしていると思われる。そのために、Ishmaelは、夜明けはまだ遠い道のりの未来にある、と云ったのだろう。IshmaelとQueequegがベッドの上で並んで横たわっている姿は、夜空で仲よく肩を並べて横たわっている双子座の姿に似ている。双子座は冬の星座であり、『白鯨』の物語の出発点であるクリスマスの頃に、東の空に姿を現す。双子座は、この頃夜どうし冬空で、仲良く語り明しているような姿を見せている。片足と片手を、一方が他方にからみ合せたように見えなくはない。ちょうどQueequegがIshmaelの体を優しく抱きかかえるような姿をしている。Castorのα星とPolluxのβ星がそれぞれの頭部で輝き、ちょうど、闇の中で二人がパイプをふかしているように見える。また二人の膝にあたる位置にもそれぞれの小さな星が輝いている。つぎの文は、この膝の部分にあたる星と関係があるとみて差し支えないだろう。

…and our two noses bending over them, as if our knee pans were warming-pans. We felt very nice and snug, the more so since it was so chilly out of doors; indeed out of bed clothes too, seeing that there was no fire in the room. (p. 86)

この文では、膝蓋骨が保温用の火鍋のようである、と云っている。表面の意味では、knee-pansとwarming-pansをかけた語呂合せに見えるが、Melvilleがふざけてしゃれを云っているのではないだろう。室内が暗く火の気がないので、暖をとるかのように、鼻先を膝小僧にすり寄せて、とIshmaelは云っているが、これは、双子座の星座のかたち、つまり星の位置と、IshmaelとQueequegの横たわっている姿が相似のかたちをしていると、表現したいためだろう。

この作品の最初の部分の章の並べ方を見ると、第IV章の*'The Counterpane'*とこの第IX章の*'Neghtgown'*は、どちらも、夜具、夜着、が章題になっていて、夜、が強調されている。物語の発端が、冬至前の厳冬の季節であって、夜、寒さ、などが、ことさらに強調されている。この頃、東の空に現れる星は、双子座であり、また、全天でもっとも明るく輝くのは大犬座のシリウスである。Ishmaelがしばしば犬に喩えられていたり、街上をさまよう姿が犬のようであるのは、新年が近づく頃、東の地平線にふたたび姿をあらわすシリウスとよく似ている。双子座のCastorとPolluxのうち、彼らはどちらもLedaの生んだ卵から生れたが、Polluxは、父親からゆずり受けた不死身をもつ。兄弟おもいのPolluxが父に願って、結局、兄弟は、一年の半分を仲よく共に冥府で過し、残る半分を共に天の星空で過ごすことになったが、この神話にもとずいて、IshmaelとQueequgの性格や特徴が作り出されていると考えると、この作品での二人のもつ意味が、単純化され、図式的に浮かび上ってくる。

nightgownやcounterpaneなどの夜具類は、IshmaelとQueequegが、双子座のように、夜空で仲良く語り合っている姿を想像させるばかりではない。体をおおって眠るためのもの、としての意味からshroudとしての意味もふくんでいる。夜明けを待つ、というのが、魂の復活を待つ、という意味もそなえている。

*'Nightgown'*では、いわばふ化する前のさなぎか卵の状態について語られている。第IV章*'The Counterpane'*で、Queequegは、移行の状態にある生物で、さなぎでもなく、蝶でもない、

Queequeg, do you see, was a creature in the transition state-neither caterpiller nor butterbly. (p. 55)

といわれたが、*'Nightgown'*では、魂の変成の過程の最初の段階というべき萌芽の状態について語られている。*'Nightgown'*では、眼を閉じることにより、人工的に闇を作り出し、その中で内省することの意義が説かれている。内省することによって、心の深奥に入ってゆき、出発点がどこにあるかを見きわめる、といったところであろうか。つぎの文が、以上

述べた'*Nightgown*'の意義を伝えている。

day-break was yet some way down the future. (p. 86)

Nothing exists in itself. (p. 86)

For the height of this sort of deliciousness is to have nothing but the blanket between you and your snugness and the cold of the outer air. Then there you lie like the one warm spark in the heart of an arctic crystal. (p. 87)

'*Wheelbarrow*'

第XIII章の'*Wheelbarrow*'には、佛教的な概念をあらわす象徴がみうけられる。手押車wheelbarrowの語には、云うまでもなく、車輪、の意があり、小さな乗物、小乗佛教、輪廻、など、佛教概念がふくまれている。

Queequegはcannibalである、とIshmaelは、たびたび言うが、それはどういう意味だろうか。つぎの文では、

after disposing of the embalmed head to a barber, for a block, I settled my own and comrade's bill; (p. 91)

香料で防腐処理を施した首かつら台として散髪屋に払い下げて、とあるが、このような意味は、あくまでも表面のものである。前章の'*Biographical*'でも、上の引用文にさきだって、

that barbed iron was in lieu of a sceptre now. (p. 90)

と、barbedという語があり、また、同じページにも、

and Queequeg now and then stopping to adjust the sheath on his harpoon barbs. (p. 91)

barbという語が使われている。そうすると、barberは散髪屋、ではなく、鉤状になったもの、あるいは、滑車の矛先、などの意ではないだろうか。blockにも、滑車、石切場で採れたままの荒材、などの意がある。また、上の文のsheathには、刀剣のさや、や、石積みの堤防、の意がある。前章で言及されているCzar Peter (p. 89) と'*Wheelbarrow*'のPeter Coffin's bull and cock stories (p. 91) には、岩石、の意として、Peterの語が用いられているのが感じられる。Rokovokoには、Rock of～の語感がある。I settled my own and comrade's billのbillには、長柄のほこ（中世の武器）halberd、なたがまbillhook、または、いかりのつめanchor flukeの先端、細長い岬、などの意がある。また、この語は、OEのswordからきている。

それでは、上にあげた'*Wheelbarrow*'の章頭の文は、なにを意味しているのだろうか。disposeには、配置する、片づける、などの意があるのでsettleと同じような意味になって、売却した、という意味ではないようである。using, however, my comrade's moneyのmoneyには、古代スパルタの鉄棒、という意があり、moneyは、Queequegのbarbed iron

をさしているかもしれない。cock and bull storiesは、こっけいなよた話、の意であるが、cockとbullは、どちらも供儀に使われるものであるし、多分に象徴としても意を含んでいる。'*Wheelbarrow*'には、eyeという語がひんぱんに使われているが、仮にbullとeyeが結びつくと考えると、bull's-eyeには、一つ目滑車（通例金色をしている）、的の中心点、正中、金星、金星を射た矢、などの意がある。また、cockには、銃の打ち金、撃鉄、標的、円錐形の山、などの意がある。したがって、上にあげたafter disposing of the embalmed head to a barber, for block, I setled my own and comrade's bill; using, however, my comrade's money.には、なにかの祭儀を行ったらしいことがうかがわれる。

IshmaelとQueequegは、Moss号という定期運搬船に乗る。Mossは人名としてMosesの変形であるが、moss号には、平底運搬船moses boatの意があるだろう。また、Mosesには、救済者delivererの意があり、船上でQueequegが田舎者の男を救った挿話を象徴している。このような人命を救うという事件と、embalmed head for a blockは、相反するようにみえる。blockには、断頭のための台、の意がある。Queequegは、cannibalであると書かれている。また、Queequegは、

> he had a particular affection for his own harpoon（=barber)…In short, like many inland reapers and mowers, who go into the farmer's meadows armed with their own scythes.（p. 91）

命を刈り取る者のようにえがかれている。Queequegのこのような特質は、佛教概念から取り入れられたものだろうか。

Melvilleは、「涅槃」'*Nirvana*'という詩を書いており、佛教を*Moby-Dick*の中に取り入れているが、それは、日本における佛教とはほど遠く、むしろインドにおける原始的な説話佛教であり、バラモン教やヒンドゥー教などからまだ分化する以前の、さまざまな土着宗教が混然とした状態の佛教から取り入れられたものである。日本の、とくに密教系の佛教は、複雑に分化しているので、宗教としての構図にはかりかねるところがあるが、その源流であるインドの原始宗教は、きわめて単純である。日本の佛教と、原始形態の佛教とは、似て非なるものである、とすら云うことができる。Melvilleが*Moby-Dick*に取り入れたのは、インドの原始宗教からであり、釈尊の説くような大乗佛教ではない。*Moby-Dick*では、ShiveやIndraやVishnuなどの神話が織り込まれ、苦行と禁欲を中心とした救いの構図がみられる。とくに、Elephantaの島の神話が、*Moby-Dick*には織り込まれている。しかし、*Moby-Dick*には、インド神話ばかりではなく、ギリシア神話やヘブライ神話も含まれており、相矛盾しない共通項のようなものが、集大成されて盛り込まれていると云えるだろう。

Queequegの特質には、インドのElphantaの伝説が取り入れられていると思われる。古代インドの佛教説話には、頭をすげかえる話がしばしば出てくる。もっともよく知られてい

るのは、Shiveの最初の息子Ganeshaの物語である。Shiveが妻のParvatiの部屋に入ってくるので、ある日、Parvatiは入浴中に体からこすり採った垢で子供を作った。それが、Ganeshaであった。彼女は、Ganeshaを戸口に置き、Shiveが部屋に入ってくるのを妨げようとした。Shiveは、思いがけない反対に会い、Ganeshaと争い、彼の首を落としてしまう。しかし通りかかった象の首を取ってきてすげかえ、Shiveは、Ganeshaを生き返らせた。

この話には、二・三の変形variationがあるが、要は、GaneshaがShive神の息子であること、Ganeshaが戸口の番人であること、彼の頭が取り変えられたものであること、である。Queequegがhead peddlerであると示されていることと、ヒンズー神話の、Ganeshaの物語とは、関連がある。それは、Ganeshaが門番であることと、新しい頭を得て復活したことである。第Ｉ章の*'Loomings'*でIshmaelが門の幻を見ており、その門がElephantaの石窟遺跡に似ている、など、Queequegがpagan idolatorだとされるその宗教がShive神の故郷であるElephanta島からきていると想像できるからである。

'Biographical'

第XII章*'Biographical'*は、Queequegの生い立ちが述べられた章である。biographicalという語は、生い立ち、の意に解されているが、ここでは、それは、表面の意味である。biographicalという語は、もっと深層の意味では、生命の図式、といった意をもっている。第Ｉ章からの章題を眺めてみると、第Ｉ章の*'Loomings'*という語には、あいまい模糊とした、霧のような、形のないもの、初原の生命の発生、あるいは、子宮の中で生命を胎もうとしている状態、といった意味が感じとれる。したがって、それに続く第II章の*'Carpet-Bag'*という語には、子宮、あるいは胎内、といった語感がある。第III章の*'The Spouter-Inn'*には、InnをInと同じものとして仮に解すると、射精、という意味が浮かび上がってくる。第IV章の*'Counterpane'*の章題には、闇の中でおおい包み暖かく保護するもの、安眠をもたらし育むもの、など、母なる胎、をおもわせる。第Ｖ章の*'Breakfast'*の字義としては、殻を破って出てくる、など、出生、誕生、などの意が感じられる。第VI章の*'Street'*でも同様に、人の世に現れる、巷間に生れでる、などといった、生命の誕生の意が感じられる。続く、*'The Chapel'*、*'The Pulpit'*、*'The Sermon'*の語義には、洗礼、など、誕生に際しての儀式の意が感じとれる。第Ｘ章の*'A Bosom Friend'*の語からは、このばあい、IshmaelとQueequegの兄弟が双児であって、形に影が沿うように、二人を切り離すことができない関係にあることを、そして、また、人はみな、肉体と魂が双児の兄弟のように密接な関係にあることが、示唆されている。このような章題を設けることによって、作品*Moby-Dick*の、いわば、創世記が、双子座の二兄弟のようなIshmaelとQueequegの出現をもって始まる。第ＸＩ章の*'Nightgown'*では、産衣に包まれた赤子のように、長い夜明けを、活動期までの成長を、待っているかのようである。これらの章に続く第ＸII章の*'Biographical'*は、

Queequegの生い立ちを語りながら、彼の人生の目的を併せて語っている。

Queequegが生まれたのは、次のような地である。

> Queequeg was a native of Kokovoko, an island far away to the West and South. It is not down in any map; true places never are. (p. 88)

Nantucketから見て南西にあたるので、おそらくそれはPequod号の沈んだ位置の近くであろう。Feidelson版の図版を見ると、それは、赤道附近、経度180°の日付変更線のあたりである。太陽がもっとも早く昇るところであり、また、もっとも遅く沈むところである。つまり、この位置は、太陽の昇るところであり、沈むところである。ここは、太陽の出入口であり、天門・地門・冥界門と呼ばれてしかるべきところである。この付近には、楽園のようなポリネシアの島々が点在している。Queequegの島が地図上になく、また、真実の場所というものが地図に記載されることはけっして無い、と書かれているが、それは、やはり、密教的な考え方をMelvilleが取り入れているためだろう。つまり、宗教のばあい、奥義というものは、どんなに顕教に見える宗教のばあいでも、言葉をもってはっきりと明かされることはけっしてない。奥義は、象徴という言語を用いて暗示されるのみである。キリスト教においてすら、言葉に出して伝えてはいけない内容のものがある。それは、天国の秘密であって、智者のみが悟べきものである。たとえば、イエスは、ご自身の変容（マタイ17：2～8）を見たことを人に伝えてはいけないと弟子たちに命ぜられた。真実の場所というものは地図に記載されていない、という語句は、真実の場所とは、例えば、天国の在り場所、や、他界の入口はどこか、や、潜在意識の中に存在すると云われる大海への通路は、などと問うのと同様に、本来、抽象的な、形を持たぬものであるから、それらの場所は記載されようがなく、ただ象徴をもって示すほかない。そのような意味に、真実の場所、というものを理解するべきだろう。地球上の、180°の経線と0°の緯線の交わるところが、彼岸と此岸との接点であるかのように、Melvilleが示しているのは、象徴としての意味においてであって、大自然の営みとして存在するその同じ原理が、人の心の中という世界の中にも同様に存在しうるかもしれない、そして、大涅槃に到る入口は人の内面にあるかもしれない、ということを、上に引用した文でMelvilleは示唆しようとしている、と解すべきだろう。biographicalという語を、生命の図式、という意味に取るのは、以上のような理由による。

それでは、その図式あるいは構図なるものは、どのようなものだろうか。Queequegの島は、

> On one side was a coral reef; on the other a low tongue of land, covered with mangrove thicket that grew out into the water. (p. 89)

片方の端には、さんご礁があり、他の端は、低い舌状になっている。このような島の形状は、*'Spirit Spout'*の中で二度言及されるSag Harbor（p. 88, 89）の形状に似ている。

Melvilleが一つの章の中で二度ないしはそれ以上言及する語は、かならず、その章にとって必要な意味がその語の中に伏せられている。そのような形の島が180°の赤道附近にあるかどうか、といったことは問題ではなく、その島の形が象徴するものに意味があると考えたい。Sag Harbor島は、大きく口をあけた鯨のような形をしている。さんご礁が、口の部分に当る。鯨の口の中に船が入っていく、という比喩は、いうまでもなく、Jonahの喩えと重なり合う。Jonahの口から出てきた船にQueequegが乗り込む、というのは、生命の復活あるいは誕生、を象徴していると云えるだろう。また、鯨の口の中に船が入ってくる、は、交接のイメージをもっている。Queequegがそこから出てくるというのは、すでに述べたように、第Ⅰ章*'Loomings'*から第Ⅸ章*'Sermon'*あたりまでの、待ちうける状態、懐妊、月満ちて、誕生、沐浴斎戒、など、章題が暗示する一連の、生命の誕生、のイメージとつらなるものとしてとらえるべきだろう。QueequegとIshmaelは、双子座の二兄弟にたとえられており、それでは、Ishmaelの生い立ちはどうなっているのか、との疑問が生じる。それについては*'Loomings'*の章の解釈のときに述べるが、*'Biographical'*と関連する部分がある。それは、次の文である。

With a philosophical flourish Cato throws himself upon his sword ; (p. 23)

このばあいのCatoについては、史実にこだわるべきでなく、大文字で綴られたCatoの、記号としてのCの形状に意味がある。また、swordは、形状としては、矢印の記号↑として、視覚的にとらえられることができる。Cと矢印の↑は、もっとも単純化されたリビドーの記号といえる。これはQueequegの生れた島が鯨のような形のLong Islandに似ており、Sag Harborのようなa coral reefの中へ船が入っていく、というのを図式化したものである。結合と誕生、という図式が、もっとも本質的な、生命の根源の図式としてとらえられるべきだ、という意味をMelvilleがbiographicalという語の中に含めようとしたのだと考えるべきだろう。Melvilleは、言葉をこのような使い方をする。それが、*Moby-Dick*の文体の特色である。一つの単語を、あるいは一つの文字に、象徴としての意味をもたせている。このように、語や文字は、つぎつぎと新たな意味や象徴を付け加え重ねられていって、パン種を入れたねり粉のように、ふくらんでいく。仏教などの考え方では、このような語や文字は、真言、種字、などと呼ばれて、これらの言葉そのものが、ロゴスと法力を持ち、神なるものや宇宙をその言葉の中に内蔵している、と考えられている。言葉が言霊をもつという考え方は、インドなどに源流をもつ仏教思想の種字観からきているかもしれない。あるいは、このような文字観は、世界の各地で発生したものかもしれないが、*'Biographical'*で、次のように、Queequegの生の目的としてあげられている、種子を播く、と云う考え方の根底にあるのではないだろうか。

But by and by, he said, he would return,——as soon as he felt himself baptised again. For the nonce, however, he proposed to sail about, and sow his wild oats in all four

oceans. (p. 90)

ここで云われているsow his wild oatsは、放蕩する、という慣用語の意味を離れて、復活の可能性を秘めた生命の種子を播く、あるいは、真理を蔵している種字を播く、などの意をもっているのではないだろうか。Queequegは、さんご環礁の一角が開いてCの文字のように見えるstraitで、Sag Harborの船に乗り移るために、彼が乗って来た丸木舟を沈めてしまう。Queequegは、彼がふたたび受洗したと感じるまでは、島に帰ってこない、と云っているが、おそらく、最初の洗礼は、丸木舟を沈めて捨身になるときであろうし、最終的な洗礼とは、Moby Dickを追って、海中に命を捨てるのをさしているだろう。最初のばあいも、Queequegには、新しい人生が待っていて、彼が命を捨てたつもりで求めたものが得られたので、このことが、Queequegの最後の洗礼が、虚しいものではなく、新しい何かの始まりであろうことを予兆している。第二の洗礼ののちにQueequegが帰る島は、天上の極楽の島かもしれない。

'Jonah Historicall Regarded'

第LXXXIII章*'Jonah Historicall Regarded'*で語られているのは、Sag Harborという愛称をもつ老人による一見まるで根據のない推測のようにみえる。Sag-Harborという名がなぜ用いられているのか。sagは、たわむ、真中がへこむ、垂下する、などの意があることに、まず留意し、つぎにSag-Horborの地図から地形を見るに、Sag-HarborはLong Island島の湾内にある。大きく口を開けた鯨のような形をした Long Island島の口の中にSag-Harborは位置する。Melvilleの関心がここでは、鯨の口中に向けられているらしい。

Sag-Harbor老人によると、Jonahは背美鯨の口中にとどまっていたことになる。老人がもっている古い聖書の挿絵には、Jonahの鯨が描かれていて、その鯨は、頭上に二本の汐吹きを打ち上げている。このような汐の吹き方をするのは背美鯨であって、抹香鯨のような歯鯨ではない。背美鯨の口中には大きな空間があって人間が数人入ることが可能である、と老人が云う。老人のあだ名となっているSag-Harborの地形と語の意味が結びつく。背美鯨には歯がないので、口中でJonahはゆったりと居心地が良かったろうと、老人はいう。

> For truly, the Right Whale's mouth would accommodate a couple of whist-tables, and comfortably seat all the players. Possibly, too, Jonah might have enconced himself in a hollow tooth ; but on second thoughts, the Right Whale is toothless. (p. 470)

*'Jonah'*で語られている話の意義は、これらの話が真実かどうかということではない。これらの話が可能であるとすれば、それだけで、*'Jonah'*で語られていることが、寓話として、あるいは秘儀として、意味をもつようになる、という点にある。背美鯨の口中が広く大きく居心地がよくて歯がない、これについて考えてみる。抹香鯨と背美鯨の頭部を甲板に吊り下げ、並べて比較している章が、LXXIV章とLXXV章であるが、これらの章から明

らかであるように、抹香鯨の頭部は男性の象徴の器官に、背美鯨の頭部は女性のそれに喩えられている。Jonahが背美鯨の口中にいて生命が救われたとすれば、その寓意はいうまでもなく、Jonahが海中の子宮とも云える処を経て、ふたたび地上で日の目をみることができた、といえることになる。鯨の胎内と聖書が伝えているのは、もっと考察してみれば、背美鯨の口中であった可能性がもっとも高く、これは、いわば、Jonahの物語のかくされた部分で、秘儀ともいうべき寓意がここにある、というのが、Melvilleの仮説であるといえる。

広い口中にいてJonahが飲みこまれなかった理由を、つぎのような格言が説明している、としている。

> "A penny roll would choke him, " his swallow is so very small. (p. 470)

背美鯨の餌は小さなプランクトンの類いであるから、硬貨一枚背美鯨は飲み込めない、ということだろう。これが事実かどうかは、物語の寓意性を重んじるとき、問題ではなくなるのだろう。ともあれ、'*Jonah*'の章で重要なのは、つぎの文で言及されているように、墓所からよみがえった、とも云えるべきことである。

> Another reason which Sag-Horbor (he went by that name) urged for his want of faith in this matter of the prophet, was something obscurely in reference to his incarcerated body and the whale's gastric juices. But this objection likewise falls to the ground, because a German exegetist supposes that Jonah must have taken refuge in the floating body of a *dead* whale. (p. 470)

この文では、Jonahが死んだ鯨の口中に逃れ助かったのではないか、と示唆されている。このばあいの復活は、とくに、死からの復活という点を強調している。

dead whale（イタリックはテキスト本文による）とは、仕止めの鯨であるかもしれない。テキストには書かれていないので、どちらとも云えないが、白鯨は、最後には仕止め鯨（fast fish）であったか離れ鯨（loose fish）であったかのどちらかである。いずれにしても、Jonahの物語は『白鯨』の原型である。Jonahが鯨によって命を救われた、あるいは復活した、という型が『白鯨』の物語と二重写しになっているので、AhabとPequad号の乗員が白鯨とともに去って行く行先きが問題になっており、そこに希望的観測が感じられる。「伝道の書」の冒頭でも述べられているように「さきにあったことが、のちにも起こる」のであれば、Jonahの出来事はまた起る、あるいは何回でも起ることになって、白鯨とともに行ってしまった人々もあるいは、というふうに当然続くようになる。この点に、'*Jonah*'の寓意と『白鯨』の関わりの、かくれた意味がある。'*Serman*'の中のMapple神父の説教のかくれた意図も、この辺にある。

Jonahは、鯨という名の、鯨の船首像をもった船に拾われたのではないか、と述べられているが、船の名前として例にあげられている"The Whale, ", "Shark", "Gull", "Eagle" (p. 471) のうち、"The Whale"と"Shark"は、Jonahの鯨やArionといるか (p. 470) など、

海の生物が生命を救った寓話にちなんだものに類するだろう。"Gull"や"Eagle"は鳥類である。これらは、Albatrosやギリシャ神話の白鳥、エジプト神話のトキやはやぶさなど、人間を導くと信じられて神聖視されてたものに類するだろう。

MelvilleがSag-Harbor老人の名を用いて'*Jonah*'で語っている寓話の主旨は、つぎのようである。Jonahが地中海で鯨にのまれて、Tigris河流域のNinevehに行くには、アフリカ大陸を回らなければならない、ということは、The Cape of Good Hopeを最初に回ったのは、鯨に運ばれたJonahであることになる。The Cape of Good HopeとCape Hornの象徴としての意味は抹香鯨のSpermが象徴としてもつ意味と同じ発想によるものであることは、すでにしばしば見てきたとうりであるが、Jonahが一番乗りの栄誉をもつと間接的な表現ながら述べられている。

間接的というのは、このSag-Harborの説は愚かなものだと、つぎのように繰り返し強調されているからである。

> But all these foolish arguments of old Sag-Harbor only evinced his foolish pride of reason-a thing still more reprehensible in him, seeing that he had but little learning except what he had picked up from the sun and the sea. I say it only shows his foolish, impious pride, and abominable, devilish rebellion agaist the reverend clergy.
>
> (p. 471～2)

このように、foolish argument ; foolish pride of reason ; foolish, impious prideといっているが、これは、Sag-Harborの説は意味がない、とおもわせる仮面にすぎない。また、little learning …he had picked up from the sun and the sea. といって、彼の知識は太陽と海から得たものである、と云い、それをdevilish rebellion against the reverend clergy教会の教えに反する異教の説である、ときめつけているが、これなども見せかけにすぎない。Ahabの考え方も太陽と海によって直接大自然から与えられたものであり、知識の伝承によるものではない。Pequad号の乗組員すべてが、従容としてAhabの考えに従っているが、彼らがAhabの考えに強制的に従ったと見るより、むしろ彼らはAhabと同じように太陽と海から本能的に直接知識をえて、進んでAhabに従ったと考えることもできる。いずれにせよ、Melvilleは超絶主義的考え方をしていたことは、Sag-Horbor老人の口を借りて愚かしさの仮装をまとわせていても、否定できない。こういったみせかけの手法は、『白鯨』全体を通じて見られる特徴である。

Ishmaelは、不死身のPolluxを原型として内包していることから見て、すべてを知る人として語っているのだから、IshmaelがSag-Harbor老人を愚か者扱いするのはおかしい。これには、Melvilleによるさらに別の意味があるものとおもわれる。Ishmaelが、look yeとかaye, ayeというときも同様であるが、foolishという語にはoの綴りが二つある。foolishは、二つの眼が並んでいるような、象形文字としてのかくれた意味をもつ用いられ方をし

ている。眼が強張されているのは、知識、知恵、真理などを認識する、などの意があって、seer見者、覚者としてSag-Harbor老人が登場していると考えられる。上の文のfoolishは、deceiving またはpretendingな用法として使われているのだろう。

つぎの文も'*Jonah*'の主意である。

> For by a Portuguese Catholic priest, this very idea of Jonah's going to Nineveh via the Cape of Good Hope was advanced as a signal magnification of the general miracle. And so it was. Besides to this day, the highly enlightened Turks devoutly believe in the historical story of Jonah. And some three centuries ago, an English traveller in old Harris's Voyages, speaks of a Turkish Mosque built in honor of Jonah, in which mosque was a miraculous lamp that burnt without any oil. (p. 472)

この文では、Jonahと鯨についての、またスペインの守護聖者ヤコブについての示唆がある。ポルトガルであれ、スペインであれ、イベリア半島には、ムーア人あるいはサラセンの文化の影響がある。この文でいわれているTurkish Mosqueは、スペインのSt. James the Greaterの埋葬地に建てられたといわれるSantiago de Compostelaではないだろうか。その理由として考えられるのは、まず次の文による。'*EXTRACTS*'に、

> "Spain——a great whale stranded on the shores of Europe."
>
> *Edmund Burke.* (somewhere.)

と書かれてあって、イベリア半島が打ち上げられた鯨に喩えられている。Edmund Burkeからの出典であるとMelvilleは書いているが、出典が正確であるかどうかは問題でない。また鯨についての引証例を数多く列挙することがMelvilleの目的であるともおもわれない。引証文も出典も不正確すぎるからである。これもMelvilleが意識して改ざんしているものとおもわれる。Melvilleの目的はべつのところにある。'*EXTRACTS*'のそれぞれの章句は『白鯨』の本文の象徴として意味がある。ここでは、イベリア半島の形状が鯨に似ているという詩的な表現であるにとどまらない。スペインの守護聖者Saint James the Greatは、Jacobusとも呼ばれ、これはJamesのラテン語名である。彼はまたSantiago (San Diego)と呼ばれる。ヤコブ伝説のうち、'Jonah'と関わりがあらうのは、次の点である。

伝説によると、ヤコブの遺体は、石の船の中に置かれた。帆が張られ、船はやがて、ある日スペインの海岸に着いた。べつの伝説によると、彼の遺体は、奇跡によって、大理石の船でスペインに運ばれたという。スペインは打ち上げられた鯨である、と'*EXTRACTS*'の中で喩えられているのは、ヤゴブが運ばれた石の船、からの暗喩であろう。石の、あるいは大理石の、船、とは、棺をさすだろうが、打ち上げられた鯨も、同様に、そこには、死がある。ヤコブが打ち上げられた地にCompostelaの寺院が建てられ、ヤコブがスペインで復活している、というべき伝説と打ち上げられた鯨を対比できるとすれば、共通するものは、死と復活、であろう。Jonahの鯨は、つねに復活の象徴であるからである。しかし、

スペインは、ヨーロッパの西のはずれ、極西の地である。地図上の位置からみて、また象徴としてみれば、スペインは、太陽の沈むところ、夜と死の支配する地といえる。Pequad号が沈むのが、日付変更線の近く、東経180°のあたり、いいかえると極東の、太陽の昇る位置である、と考えると、『白鯨』の主題が死と復活である、とうなずける。*'Jonah'*は、スペインを、鯨の死の象徴として位置づけながら、同時に、ヤコブの復活の地であると指摘して、復活の希望と可能性を示唆している。Jonahを運んだ鯨がCape of Good Hopeを越えなければ地中海からNinevehへ行くことができない、とSag-Harbor老人が主張するが、彼の説には、死と復活の寓意がある。地中海からジブラルタル海峡を抜け、希望峰を経由して、TigrisのほとりNinevehまで鯨に運ばれて行く、というのは、死の世界を通過し、復活の地の楽園に行く、を意味する寓意となる。地中海Mediterranean Seaは、字義どうりには、地下の冥府の海、である。Tigris河のほとりは、人類発祥の楽園の地、といわれている、など、*'Jonah'*の寓意と結びついている。この寓意をMelvilleは、上の引用文にあるように、advanced as a signal magnification of the general miracle と称している。上にあげた文は、Bayleの*Dictionary*からMelvilleが思い違いをして引かれたものだといわれているが（p. 472)、Melvilleにとっては、かくしてある意味を読者が引き出すための手掛かりとして、象徴として、用いるのが目的であって、引証文献を正確に並べることそのものが目的ではない。また、今日に至るまで、キリスト教徒の reverend clergyではなく、highly enlightened TurksがJonahの歴史物語を敬虔に信じている、と述べて、Melvilleは、Sag-Harbor老人のfoolishぶりこそenlightenedであると云っている。Turkish Mosqueについては特定できないが、Melvilleが云うそのトルコ寺院で油なしに燃えているランプは、Jonahの復活の象徴である。

*'EXTRACTS'*はすべて、Jonahの死と復活を側面から傍証するものとして、置かれている。二、三あげると、つぎのようなものがある。

> "There go the ships; there is that Leviathan whom thou hast made to play therein."
>
> (*Psalms*)

'Jonah'では、これに応えて、次のように書かれている。

> For truly, the Right Whale's mouth would accommodate a couple of whist-tables, and comfortably seat all the players. (p. 470)

'Heads or Tails'

第XC章の章題のheads or tailsという語句は、硬貨を投げて、表か裏かを当てて勝負するときの言葉である。headは頭像のある硬貨の表をいう。tailには下半身lower partの意がある。結局これが*'Heads or tails'*のかくれた意味になる。この章には、つぎのような意味をもつ題辞がついている。

"Concerning the whale, it really suffices that the king should have the head and the queen should have the tail." (p. 511)

王が頭部を取り、女王が尾部を取るべきである、というが、Ishmaelによると、鯨には頭部と尾部の中間に当る部分はなく、りんごを半分に割るようなもので、頭部と尾部に分けるなら、上半身と下半身に二等分するしかないことになる。

A division which, in the whale, is much like having an apple ; there is no intermediate remainder. (p. 511)

このIshmaelの言葉も'*Heads or Tails*'の意味を知るための手掛かりとなる。つぎのIshmaelの言葉も同様である。

But is the Queen a mermaid, to be presented with a tail ? An allegorical meaning may lurk here. (p. 514)

女王は人魚であるから、尾を献上されるべきであって、このあたりに寓意が潜んでいる、とIshmaelはいう。なぜIshmaelがこのように云うのか、その理由について考えてみる。

"Ye tail is ye Queen's, that ye Queen's wardrobe may be supplied when the black limber bone of the Greenland or Right whale was largely used in ladies'bodices. But this same bone is not in the tail ; it is in the head, which is a sad mistake for a sagacious lawyer like Prynne. (p. 514)

女王の衣裳戸棚がwhaleboneでもって満たされることができるように尾は女王のものでなければならない。尾は女王のものである、となっているが、whaleboneを鯨骨であると解釈すると間違いが生じ、かくされた意味からかけ離れたものになってしまう。ここで意味されているwhaleboneは、鯨骨というのではなく、鯨のひげのことをいう。そのつぎの文も、黒くしなやかな骨が淑女の胴着に用いられていた、と訳してしまうといけない。black limber boneとあるが、黒い骨などありえない。ここで、しなやかな骨は尾にある軟骨をいうのだろう、と取り違えられてしまう。ところが、ここで云われているboneは、ひげ鯨の口中の、繊維状のひげのことをさしているのである。抹香鯨は歯鯨であるからひげがない。背美鯨はひげ鯨である。Melvelleは、背美鯨のblack limber boneである、とことわっている。したがって、そういうboneは尾の中にはなく頭部にあるのだから、Prynneのような賢明な法学者が悲しむべき過ちをおかしている、とMelvilleは云っている。女王の衣裳には背美鯨の口中のひげがもちいられているのだから、女王には背美鯨の頭部を与えるべきだ、と云わなければならないのに、尾を与えるべきだ、と云うとは、正確を期さなければならない法学者ともあろうPrynneは間違っている、ということになって、上記のIshmaelの文意は通ることになる。boneが骨ではなくひげであるというところに、この文のcruxがある。抹香鯨と背美鯨の頭部の持つ寓意についてはすでにMelvilleは第LXXIV章と第LXXV章でそれぞれ述べている。抹香鯨の頭部は男性の器官に、背美鯨は女性のそれに喩えられて

いる。

しかし、一方Ishmaelはつぎのようにも云っている。女王には背美鯨の頭を与えるべきだと云ったほうがよいかもしれないが、法学者が女王に尾を与えるべきだと云うなら、その中にも寓意としての真理があると。抹香鯨と背美鯨の比喩でいわれているのは、男性原理と女性原理の交合のことである。これを天体の運行で表わす語がある。それはdragon's headとdragon's tailであって、月または惑星の昇交点と降交点をいい、月または惑星が太陽と交わる点である。またそれは太陽の通る黄道と月の通る白道の交わる点である。王は太陽に、女王は月に喩えることができる。Queen Goldという語についてIshmaelは言及しているが、この語からは金貨のイメージが、また丸い月のイメージが浮ぶ。金貨の表と裏、太陽と月、王と女王など陽と陰の要素が交わるイメージがある。headが岬のように突出したものをあらわしていると同様、tailにはinside, entrail, pouch, bowelなどの意がある。大自然の中のさまざまなリビドー幻想を法学者ですらはからずもとらえて、女王に尾を捧げるべきだと云った、とIshmaelは考えるのだろう。『白鯨』には、自然の移りかわりや天体の運行など暦法が物語の進行に大きく組みこまれているが、この'*Heads or Tails*'の章でも天体の動きが暗に示されている。それは、headsが　dragon's headについて、tailsがdrogon's tailについて言及していると考えられるからである。いずれも、太陽の通る黄道が天の赤道と交わるところであり、昼夜平分点である。dragon's headとは春分点のことであり、dragon's tailは秋分点をいう。またdragon's headは昇交点と、dragon's tailは降交点と、呼ばれるが、それは、黄道が天の赤道と交わって春分点を通過すると、その日を境として太陽が高度を上げ昼の時間が一日々々と長くなっていくからである。同様に、秋分点を過ぎると黄道は天の赤道の下へ次第に沈んでいく。黄道のゆるやかな弧を描きながら天の赤道と交わる軌道が竜の姿になぞらえられている。きらきら輝く竜が天空の海上に姿をあらわし、ゆるやかな円弧を描きながら長い尾をひきずって頭上高く遊戈する。春分点をその竜の頭、秋分点をその竜の尾とみたてている。その竜は天空を旅する太陽である。海上でまばゆく輝く白鯨の姿が太陽のように美しいことの意味をどのように理解すればよいのか。太陽、天空を泳ぐ竜、幻想の世界の白鯨、これらを共通するイメージから、神の使者としての白鯨がある。Ahabが白鯨を善的働きとして見ていたか、そうでなかたか、を知る一つの判断材料になる。季節の移り変わりは『白鯨』の解釈に欠かすことのできない材料である。Pequad号は冬至の厳寒の候に出発し次第に太陽の盛んな気候と緯度に入っていくなど、また白鯨の動きが太陽の黄道上の運行に似ているなど、季節の動きはさまざまな意味をもっている。'*Heads or Tails*'の章では、黄道と赤道の交点、つまり春分と秋分が意味をもつことが示唆されている。この地点は、述べられている状況から察するに、Pequad号が没した位置であり、赤道上東経180°の地点である。また'*Heads or Tails*'で強調されていることは、交合の概念である。それは生産と豊穣の概念である。生殖と多産は、'*Heads*

or Tails'の前章の'*Schools and Schoolmasters*'とその前々章の'*Grand Armada*'の主題になっている。地上における生産と豊穣、あるいは生殖と多産は、鯨のそれによって可視的にイメージとして象徴されているが、それが天上的と云うべき、魂の世界においても、霊的な生産と豊穣が存在するのでは、という想いの探求と過程が『白鯨』のテーマであるといえるので、天と地の交合などというものは、不可視の世界のメカニズムを示唆し、魂の天上における復活を暗示するものである。地上から天上へ昇るにも道や通路があるはずだという考え方も『白鯨』のテーマである。次元を地上から天上へ拡大して『白鯨』のもつ意味を考えるべきであって、地上の尺度でもってのみ『白鯨』を考えるとき、この作品の主題を、善か悪か、といった角度でしか眺めることができなくなり、魂の永生というMelvilleの意図した本質が見えなくなってしまう。

headsとtailsの二つの部分に分ける、というイメージには、切断、の概念がふくまれているといえる。'*Jonah Historcally Regarded*'の章でみられるように、『白鯨』に、スペインのヤコブ伝説が深くかかわっているが、'*Heads or Tails*'にも、かくれた意味として、ヤコブ伝説が関与しているといえる。ヤコブは、headを切断されたといわれているからである。洗礼者ヨハネもそうであったといわれているが、この同じ比喩が、復活、の思想へつながっていくと考えられる。'*The Pulpit*'で、Mapple神父にはどこか接木されたようなところがある、と描写されていたが、Mapple神父には、ヤコブが重複していると考えるのはどうであろうか。

> Father Mapple was in the hardy winter of a healthy old age ; that sort of old age which seems merging into a second flowering youth, for among all the fissures of his wrinkles, there shone certain mild gleams of a newly developing bloom-the spring peeping forth even beneath February's snow. … there were certain engrafted clerical peculiarities about him, imputable to that adventurous marine life he had led. (p. 67)

二月の雪の下から芽を出す、あるいは、接木されたような特異性、など、生命を樹木に喩えて、Mapple神父に、復活、のイメージを与えているが、これは、ヤコブの聖遺体が石棺の船に乗せられてスペインに漂着した伝説と共通するものである。また、海から上ったヤコブが体中に海草をびっしり付け、それを引きずっていた、といわれるが、Mapple神父も教会堂に入ってきたとき、雨にぬれた合羽をひきずるようにしていた。

> …his taupaulin hat ran down with melting sleet. and his great pilot cloth jacket seemed almost to drag him to the floor with the weight of the water it had observed. (p. 67)

また、Mappleという名前も、Mapleとappleが接木されたような、頭と胴がくっついたような感を与える。このような、二分されたheadとtailから派生して生じる豊かな生命、高貴な精髄としての鯨油、など、復活、再生、のイメージは'*The Great Heidelburgh Tun*'の章ほか、いたるところに見られる。

'Cetology'

第XXXII章'*Cetology*'「鯨学」。この章は、もっとも誤解されている章の一つである。枝葉末節にとらわれて、物語に関係のない不必要な鯨の説明を試みている、そのため、この章のために作品の価値が減ぜられる、などと考えられている。Melvilleは、鯨に関する知識をひけらかしているように見える。しかし、この章を事実と照らし合せてみると、Melvilleの鯨学は、まったく事実に反していることがわかる。というのは、鯨族のうちで、最大にしてもっとも強暴な鯨は、抹香鯨ではない。最大の鯨は、白長須鯨であり、抹香鯨のおよそ二倍ある。抹香鯨は、もっとも愚鈍な、そのため最も捕獲の容易な鯨ですらある。この章でとくに問題にされるのは、抹香鯨とせみ鯨である。その他の鯨の分類も、科学的とはいえない。この章の鯨学は、まったくべつの視点にもとずいて分類されている。Melvilleが分類の基準にしているのは、象徴としての意味をもつかどうかという点にあって、科学の事実にあてはまるかどうかをMelvilleは問題にしていない。鯨が哺乳動物であるのは事実だが、Melvilleは、これをまったく無視して、鯨は魚であるという立場をとっている。鯨が魚でないのは否定できない事実であり、それを知りつつMelvilleがあえて否定するのには、それなりの理由がある。聖書で、鯨は大いなる魚と呼ばれている。またイエス・キリストは魚にたとえられることがある。鯨が魚でないことになれば、救いの構図としての象徴が成り立たなくなる。文学としての真実と科学としてのそれとは別もの、という立場をとる、とMelvilleは断っている。

> Be it known that, waiving all argument, I take the good old fashioned ground that the whale is a fish, and call upon holy Jonah to back me. This fundamental thing settled, the next point is, in what internal respect does the whale differ from other fish. … lungs and warm blood ; whereas, all other fish are lungless and cold blooded. (p. 183)

Melvilleは、まず、鯨が魚であるという古い説に従うことと、つぎに、鯨が他の魚と相違するのは有肺と温血のためである、とする。温かい血液は、キリストの受難やぶどう酒のイメージと結びつく。肺は、chestとも呼ばれるように、箱、ひつぎ、など、ヨナの物語とつながり、生命、死、復活、などの寓意をふくむ。

つづいて鯨族の定義として、Ishmaelは、水平の尾をもち汐を吹く魚a spouting fish with a horizontal tail (p. 183) であること、と云う。これを、熟慮の末の定義であるHowever contracted, that definition is the result of expanded meditation. (p. 183)、と云い、Melvilleは、鯨族であるはずのDugong儒艮は汐を吹かないからという理由でDygongを鯨の範ちゅうから除いている。Melvilleが汐吹きと水平の尾にこだわる理由は、汐吹きは、射精や、種播き、など、生命や豊穣の象徴であるからであり、また、水平の尾は、大気中に高くあげられたとき、草原に立つ十字架のように見えるからである。十字架は死と復活の

象徴であるからだ。'*Cetology*'の冒頭で、Ishmaelは、つぎのように云う。

> Already we are boldly upon the deep; but soon we shall be lost in its unshored, harborless immensities. Ere that come to pass; ere the Pequod's weedy hull rolls side by side with the barnacled hulls of the leviathan; at the outset it is but well to attend to a matter almost indispensable to a thorough appreciative understanding of the more special liviathanic revelations and allusions of all sorts which are to follow. (p. 179)

ここのsoon we shall be lostは、大洋の上で芥子粒のような微小な存在になってしまう、の意と、MobyDickに曳かれて海底に失われてしまう、の両意が感じられる。そうなるまえに特殊なrevelations and allusions「知識文献」(阿部) に精通することが不可欠である、とあるが、このばあいのrevelations and allusionsには、秘儀としての黙示や黙喩といった意味もふくまれており、そういったかくれた意味を理解するのが不可欠であるということだろう。鯨の定義が瞑想の中で拡大解釈されて生じたものthe result of expanded meditationであるとIshmaelは云うから、それが、鯨が示す黙示や黙喩から導かれて分類の範ちゅうとなったと考えてよいだろう。分類は、二折判Folio、八折判Octavo、十二折判Duodecimoなど書物の寸法の大きさに喩えて並べられている。これなどは、鯨がその形態と生態でもって無言で象徴しているものが書物のように雄弁に深い啓示を語っている、とMelvilleが考えているためであろう。

二折判鯨の典型として、抹香鯨 (Sperm Whale) があげられている。八折判には五島鯨 (Grampus)、十二折判には海豚 (Porpoise) があげられている。

第一巻 (BOOK I) 二折判第一章 (CHAPTER I) 抹香鯨；抹香鯨は、まぎれもなく地球上最大の住民であり、鯨のうちもっとも恐ろしきものである、

> He is, without doubt, the largest inhabitant of the globe; the most formidable of all whales to encounter; (p. 184)

とMelvilleは云うが、わが国の捕鯨史[1]によると、「この鯨は性最も遅鈍であって十数本の矢にても仕止める事が出来、死しても他鯨のように沈まず、時としては一隻の舟にて二頭も仕止める事がある」[1] とある。もっとも、Essex号が抹香鯨に襲われたのは事実であるから、一概に、抹香鯨は遅鈍であるとは云えないだろうが、この資料は、Melvilleの云う抹香鯨の性質にたいして一考を要する資料ではある。Mevilleがあげている抹香鯨の形態の特性は、Trumpa (Possibly from "tramp" (Old French trompe), referring to his spout.); Physeter (A large blowing whale; the Greek word); Anvil Headed (鉄砧); Cachalot; Pottsfish (Pottfisch (pot fish)); Macrocephalus (Having a large head) (以上Feidelson) となっており、このうち、Anvil HeadedとMacrocephalusは頭部が、鉄砧のような特殊な形をしていること、また、大きいこと、を伝えている。他の語は、汐吹き、を特徴としてあげられている。事実は、頭部の大きさも、体全体の大きさも背美鯨 (Right whale) の方

がはるかに大きい。鯨族はすべて汐を吹くがMelvilleがとくに汐吹きを特徴としてあげているのは抹香鯨についてのみである。これは、頭の形が男性の器官に似ていることと、Sperm whale という名からsemenが連想され、この作品の主題である豊穣を示すイメージとして抹香鯨がもっともふさわしいからであるのは云うまでもない。この鯨は、「全身脂肪に富み殊に頭部が丸く大きく脳油を多く汲み採る事が出来る。この脳油は他の鯨油に比して高価である。要するにこの鯨の価値は脳油にあるのである」[2]とあるように、この点で抹香鯨がもっとも貴重であることに異存はない。戴冠式の塗油や祭壇の灯火に使われるなど、またそうした儀式が象徴するところの神秘に関わるなど、抹香鯨が鯨の種族の中で最上位に位置づけられているのはうなづける。

'The Ship'

第XVI章の'*The Ship*'では、IshmaelのPequod号への乗船が決まることになる。船主の一人Captain Pelegの名は、<Peel+legから取られたものだろう。この章では、この航海の謎をとく手掛かりがいくつか説明される。AhabのことやPequod号のことなど、たとえば、Pequod号のマストが三本とも日本近海で台風のために根こそぎ折れてしまい、日本の木材を使って補修されることなどが明らかにされる。

> Her masts——cut somewhere on the coast of Japan, where her original ones were lost overboard in a gale (p. 105)

マストが、いわば、接穂された状態にある。このことは、二等航海士の名がStubbと云い、切株stub、を思い起こさせることやAhabの足がpeeled legであり、切株のような脚に鯨骨を接穂された状態であるのと関連があるだろう。Mapple神父の名が、Mapleとappleが接木されたものであることや、彼が、どこか接木されたengrafted (p. 67) 雰囲気をもつ、と説明されていることなど、一連の、接木、接ぎ穂、の概念が浮かび上がってくる。Mapple神父のばあいは、船乗りという古い木に神父という新しい木をつないだのだが、Ahabの足とPequod号のマストにも、新しい生命をつないだ、の意がうかがわれる。さらに感じられるのは、これらの喩えが何のためであるかと云えば、もっと目に見えない永遠の生命あるいは永遠の回帰といった概念の象徴であるにちがいないということである。これについては、章を追って明らかにしたい。

PelegがIshmaelに、世界が見たいそうだが船首から何か見えるか、と問うとき、Ishmaelは、答えて云う。

> "Not much", I replied——"nothing but water; considerable horizon though, and there's a squall coming up, I think". (p. 110)

この答えには、重要な意味がある。見渡すかぎり横一文字の水平線があって、天からは疾風の兆しが降りて来ようとしている。これは、天と地の間に、巨大な十字形がえがかれよ

うとしている図である。「ヨブ記」の中で、神がつむじ風の中から顕現されるが、Ishmaelが船首に立って見る風景は、聖書のその故事を踏まえたものである。Pequod号の航海は、神と対面するためという形而上の目的をもつのだと、ここで明かされる。IshmaelはCaptain Bildadに会うが、このときBildadは、Transam (p. 110) の上に座っている。transamは、竜骨にたいして直角に組まれた太い横木であるから、ここでも十字形の比喩はあきらかである。

Pequod号に乗船の契約をするに先だって、Yojoの託宣にしたがい、Ishmaelに船の選択がゆだねられる。港に停泊していた三隻の船は、Devil-DamとTit-bitとPequodであるが、Devil-DamのDevilには、fellow ; person of energyの意味が感じられる。Damは、貯水ダム、せきとめ水、などの意味があるが、Bulkingtonの胸がCofferdam (p. 41) のようであるのと関連して、箱、ひつ、障害、堅固なもの、などの意ももつだろう。Tit-bitはtid-bit; choice morsel; a piece of good news、美味な食べものの一口、ひとつの良い知らせ、などの意をもつ。Pequodは、pea+cod; pea-podなど、えんどう豆のさや、といった意がある。これは、第XII章'*Biographical*'で、Queeqegが、四つの大洋に麦の種を播く、sow his wild oats in all four oceans (p. 90) と云って、彼が海に乗り出す理由を述べているのと同様の比喩に属するだろう。太平洋の海もつまるところ、四つの大陸によってせき止められた、盆水、といえるかもしれない。sow one's wild oatsは、表面上は、放蕩をする、の意であっても、Queequgは放蕩などとは無縁であるし、彼の名も、Key+keg、または、Que (=Quebeck)+keg、に分けてみると、kegは、小樽、小舟、であり、coffer damの、箱、囲いぜき、潜函、などと類似の意味をもつことになる。keyには、Peter Coffinの名や、'*Town-Ho's Story*'でGolden Innの中でたむろするPedroの名が示唆するように、天国の番人であるとされている使徒ペテロの持つ鍵との関連がうかがわれる。第VIII章'*The Pulpit*'で、Mapple神父はわが身を難攻不落のQuebec (=岩) (leaving him inpregnable in his little Quebec p. 68) とした、とあるので、Queequegの名前にQuebecの省略形のQue〔kwi〕が織り込まれていると考えても不自然ではない。ふたつの語をつないで、言葉の接ぎ木ともいうべきものが作られている例は、この作品の中に数多くある。Queequegの名前が、岩の小舟、を意味しているなら、これは首だけが石棺に入れられて海を渡り、スペインのCompositeraの浜に打ち上げられたヤコブ聖者の伝説にちなんだものと云えよう。Queequegがheadpedlarであると紹介されている理由は、この伝説との関わりにおいて眺めるべきだろう。Queequegは、生と死の境にいて見張る番人であるかのように、たびたび人命を救い、人を生き返らせている。Queequegが、種を播く、というとき、この言葉には、生命の種を伝播する、などの意がふくまれているだろう。

続いて、squared-toed luggersやbutter box galliots (p. 104) といった種類の船について言及があるが、これらの船は、四角い箱のような、の印象を強調している。mountainous

Japanese junks (p. 104) が具体的にどんな型の船を指すのかわからないが、IshmaelがJapanについて言及するとき、特別な意味がこめられているのが感じられる。Her masts—cut somewhere on the coast of Japan (p. 105)、これは、第VII章'*The Chapel*'にあるkilled by a Sperm Whale on the coast of Japan (p. 64) と同様、また他の個所でも何回となくJapanについて言及されるが、どの場合にも感嘆の念をもって語られている。Japanについて語られるとき、いつも船や人には、大きな被害がともなっている。その理由は、Japanが、世界地図上では、東の端に位置しており、極東の国であるから、日本がもっとも早く太陽の昇る国となるからだろうか。Ahabが太陽の昇る入口とも云うべき場所へ向って進んでいるのは明らかであり、そういった意味でJapanは、太陽の入口にもっとも近い国としての象徴をもっている。

Pequod号の帆柱は、日本の樹木で作られていることになっている。

> Her masts——cut somewhere on the coast of Japan, where her original ones were lost overboad in a gale——her masts stood stiffly up like the spines of the three old kings of Cologne. (p. 105)

mastsは複数になっており、帆柱は、三本とも日本の地で育った木でできているのだろう。それらの帆柱は、Cologneの三人の昔の王の背骨のように、不屈にがん強 (stiffly) に立っている。いにしえの三人の王とは、Feidelsonの指摘のように、キリストを礼拝した東方の三博士を指しており、彼らの頭骨はCologneの寺院に保存されていると云われている。Cologneに、象徴としての意味も掛けられているだろう。コローン水 (eau de Cologne)、芳香をもつ水、と云われるようにCologneという語には三博士が献上した没薬、乳香、黄金など高貴な捧げ物の意が汲みとれる。Pequod号はやがて沈むことになるが、三本の柱が贈り物としての意を含んでいることから、Pequod号の最後には、なにか秘跡の成就のようなもの、たとえば、永遠の生命の誕生、復活、といったものが期待できる暗示がある。

背骨の象徴については、第LXXX章'*The Nut*'でIshmaelがこれについて語っているが、ここで、骨のもつ意味について少し述べてみる。仏教では、釈尊の骨であるとされる仏舎利の上に塔を建て、寂滅と再生を願う。*Moby-Dick*には、仏教の概念が多く取り入れられているのは明らかであるが、キリスト教の観点からも、同様のイメージがあって、最初のAuthorized Versionの聖書には、挿絵として、石棺の上に復活の図が、また箱船の上に、人類の系統図が、まるで、生命の樹、のように描かれている、などから考えてもPequod号の三本の帆柱に、復活の暗示があるのは否定できない。*Moby-Dick*の中にも、乳香、没薬、黄金に当るものがあって、それらは抹香鯨の鯨脳油と竜涎香、および、あの帆柱に釘づけにされたスペイン金貨である。第CXIV章'*The Gilder*'に見られるような、赤道上に輝く太陽や、白鯨の汐吹きや白い航跡なども、同様の象徴としての意味をもっているだろう。

claw-footed lookは、Pequod号が、台座、棺台、箱、のような雰囲気をもっていること

になり、一連の、箱、四角いもの、のイメージに合致する。all four oceans (p.104) も、同じページに置かれている語であって、四という数字が、四角いもの、地上、死すべき運命のもの、などを強調し、天上的な三という数と区別されているようである。

Devil-Damには、水門が開かれて水があふれ出るための準備をして、水が貯えられているところ、といった印象がある。また、大地の胎内、といった印象もある。Tit-bitには、一粒の辛子種、福音の知らせ、などの意味がある。Pequodという名前にはpea+cod, pea-podとして、生命の種子、といった意味があり、船名はみな、なにか期待にみちた、たがいに一脈通じる概念をあらわしている。

Peleg船長は、目尻にcrow's feetのようなしわがあって、足という語がつかわれている。Pelegという名は、peel+legであるから、やはり、足、が問題にされている。IshmaelにAhabが片足であるのを告げるのもPeleg船長である。crow's feetにも象徴としての意味がある。

> only there was a fine and almost microscopic net-work of the minutest wrinkles interlacing around his eyes, which must have arisen from his continual sailings in many hard gales, and always looking to windward ; —for this causes the muscles about the eyes to become pursed together. Such eye-wrinkles are very effectual in a scowl.
>
> (p. 107)

これは、Peleg船長が風上の方向を永年にわたり凝視していたものだから、目のまわりに細い網目のような小皺がぎっしりとできて、それをcrow's feetのようだと云っているのだが、聖書では、神が姿を現わされるのはつむじ風の中から、と云われている。神がヨブに答えられるのも、つむじ風の中からである。Peleg船長は、つむじ風の方向、つまり、神の住まいの方向を長い年月にわたって凝視していたために、眼のまわりにcrow's feetができたことになる。彼の眼は、ちょうど、太陽とそれを取り囲む光輪のやのような形をしている。あるいは、舵輪のやのようでもある。彼の眼のcrow's feetについて、つぎのようにも書かれている。

> But concentrating all his crow's feet into one scowl, Captain Peleg started me on the errand. (p. 109)

目尻の皺をすべてすぼめて、わたしを駆りたてるとあるが、これも、Peleg船長の目が太陽の光輪か舵輪のような形をしていることに注意を促しているのだろう。Pele船長が、yesのかわりに、aye, ayeと云うが、これも、Quaker教徒の言葉であったとはいえ、eyeと同音であることが意識されているだろう。

Peleg船長はIshmaelに、世界を見るとは何を意味するのか、へさきから何が見えるか、と問う。それに対してIshmaelは、つぎのように答える。

> "Well, what's the report ? said Peleg when I came back ; "what did you see ?"
>
> "Not much", I replied——"nothing but water ; considerable horizon though, and

there's squall coming up, I think."

"Well, what dost thou think then of seeing the world? Do ye wish to go round Cape Horn to see any more of it, eh? Can't ye see the world where you stand? (p. 110)

Ishmaelが風上の方向に見たものは、水と空、それらを区切っている限りない地平線、そしてスコールが近づいている空模様、である。地平線がつくる横一文字、こは、十字架の横梁のようなものである。どんなに接近しようとしても、接近不可能で、つねに天と地を分け隔てている地平線、人間の昇天を拒む一線である。それに反して、スコールの気配は、天から地上へ伸びてくる一線、神が下へはしごを降ろし、人間に橋渡しとてして手を差し出そうとされる兆し、を意味し、十字架の縦柱の象徴である。Ishemaelが前方の空模様を見て、Pelegに報告した答えには、深い意味があることになる。神の住まいと云われるつむじ風は、中心が渦巻いている台風のようなものだろう。Ishmaelがその接近を予想したスコールは、竜巻のような、一種のつむじ風であろう。つむじ風や台風の目はその周囲に放射線状に渦が巻くので、ある意味では、Peleg船長の目と形が似ていると云えるだろう。見るという目のはたらきは事物の本質を認識することだとPeleg船長は、いわば禅問題の公案のような問いかけをし、Ishmaelは、それに正しく答えている、と云えるだろう。Peleg船長が、何が見えたか、世界を見るというのはどういうことだと思うか、What did you see? What dost thou think then of seeing the world?と問うその問いかけの中に、作品*Moby-Dick*の意図と答えがかくされている、といってよいだろう。それは、読者に対する問いかけでもある。Peleg船長は、すっぽり身体を包む水色の服を着ているが、太陽のような目をして、青空を形どった服を着ているというのだろうか。

Pequod号の奇怪な外観はつぎのように記されている。Pequod号の装備には、食人種のような印象がただよう。

She was apparelled like any barbaric Ethioian emperor, his neck heavy with pendants of polished ivory. She was a thing of trophies. A cannival of a craft, tricking herself forth in the chased bones of her enemies. All round, her umpanelled, open bulwarks were garnished like one continuous jaw, with the long sharp teeth of the sperm whale, imserted there for pins, to fasten her old hempen thews and tendons to. Those thews ran not through base blocks of land wood, but deftly travelled over sheaves of sea-ivory. Scorning a turnstile wheel at her reverend helm, she sported there a tiller; and that tiller was in one mass, curiously curved from the long narrow lower jaw of her hereditary foe. The helmsman who steered by that tiller in a tempest, felt like the Tartar, when he holds back his fiery steed by clutching its jaw. A noble craft, but somehow a most melancholy! All noble things are touched with that. (p. 105〜6)

Pequod号は、前方から見ると、ちょうど口を開けた歯鯨の下あごのようである。並んだ歯

のように見える抹香鯨の骨は、戦利品の頭骨をつらねた首飾りのようにもみえる。Pequod号は、黒船であるから食人種の黒人のようにみえる船である。これは、Queequegがどくろをぶら下げて売り歩いていたこととアナロジーになっている。*Moby-Dick*には、仏教的要素が多分に取り入れられているが、それは、日本に入って来たような東漸のものとは違って、どちらかと云えば、バラモン教やヒンズー教の色彩を残した原始仏教的なものである。たとえば、自在天という名の仏像（高野山仏教美術館所蔵）があり、首の回りに、腰まで垂れるほどの瓔珞、と呼ばれる首飾りをしている。首飾りの玉の一つ一つは、じゅず玉のように、どくろでできている。Pequod号の外観は、この仏像のバラモン荒神のような姿に似ている。キリスト教にも、同様の例がある。キリストが十字架にかけられた場所は、Golgothaの丘と呼ばれ、語源は、(Heb.)gulgoleth＝skullであるから、どくろ、という意味をもっている。

Pequod号の印象は、つぎのようにも描かれている。

> Her venerable bows looked bearded. Her masts-cut somewhere on the coast of Japan, where her original ones were lost overboad in a gale-her mast stood stiffly up like the spines of the three old kings of Cologne, Her ancient decks were worn and wrinkles, like the pilgrim-worshipped flagstone in Canterbury Cathedral where Beckett bled. But to all these her old antiquities, were added new and marvellous features, pertaining to the wild business that for more than half acentury she had followed. (p. 105)

Pequod号は、擬人化されて、AhabやMapple神父、あるいはまた、三博士のような、風貌をしている。船は、半世紀以上荒海の風雪に耐え、ひたいには深いしわが刻まれ、あごひげさえたくわえているように見える。幼児キリストにまみえた三人の老王の背骨のような三本の帆柱は、あらたに日本の樹木で造られたものである。Mapple神父がどことなく接ぎ木されたような印象を与え、いわば第二の春を楽しんでいる、と書かれていたが、この船の風貌とアナロジーになっている。三人の老王、Mapple神父、Ahab、キリストの誕生、新しい生命、復活への希求、など、上の引用文は、同じ主題の比喩で貫かれている。また、Beckettの敷石、や、Pequod号の受難、は、石棺や棺台のイメージと結びつき、Ahabの最後も、復活の秘跡にあづかるための、計画された目的の成就であったのではないかという図式が容易に導き出せる。棺台から樹木の茂るさまは、すでに述べたように、聖書のAuthorized Versionの初版にも描かれ、エデンの園に守られて存在すると云われる生命の樹を象徴しているだろう。太陽の生まれる国であると考えられて、日本の樹木が復活の象徴に用いられているのだろうか。黄金の国ジパング、と言い伝えられたのと、同じ発想によるのだろうか。'*Doubloon*'のスペイン金貨も赤道直下のQuito産出の金でつくられているから、太陽と関連しており、その、非腐蝕性、不死性、が、Ahabの、永遠の生命願望、と結びつ

く。それには、復活の前提条件として、人はまずキリストのように命を捨てなければならない。Pequod号は、悲しみの表情をたたえており、それは、ちょうど、キリストの顔のようである。気高いものはすべてMelancholyの気をただよわせている、とPequod号についてMelvilleは語っているが、それは、死を通過しなければならない、と認識しているためであると、Ahabが感じているように、彼自身の復活は確実に保証されているだろうか。ここでCanterburyのBeckettの名が言及されているが、Beckettの受難の場であるflagstoneが、岩石、であることを伝えたいためであって、Melvilleが、岩、へのこだわりを示すのは、天国の鍵をもつといわれるペテロの名が、岩、を意味するなど、石棺、棺台、としての象徴をPequod号がもつのを強調するためだろう。語としてのCanterburyは、聖書や楽符などを置くための、仕切りつきの台、の意があり、bury（その意はあきらか）の語尾をもつ。また、canterには、馬術の用語として普通駆け足（easy gallop）の意があり、Canterburyへの参詣で僧たちが馬をゆるゆる進めたことにちなむという。Becketには、海用語として、取手索（<beak）の意がある。Pequod号は、どくろをつらねた瓔珞、のような取手索をへさきに巻きつけており、舵手は、嵐の中でPequodを操縦するとき、荒れ狂う馬のあごをつかんで制馭するTartarのような気がしただろう。

いずれにせよ、ヤコブの頭骨が収められた石棺が漂着したスペインのコンポステラの地に泉が湧き出したといわれるヤコブ伝説が取り入れられていることや、芳香水（eau de Cologne）としてその名が冠せられたCologneの地に三博士の頭骨が葬られていることへの言及など、岩石から清水が湧き出す、という救いを約束する象徴が暗示されているのは云うまでもない。また、この象徴が、Town-Ho号の船内から真水が湧き出したという挿話と関わっているのは云うまでもない。

'EXTRACTS'

Sub-Sub-Librarianのための献辞である*'EXTRACTS'*について考えてみる。『白鯨』のすべての章がそうであるように、*'EXTRACTS'*も多くの比喩が判じもののようにかくされている。Melvilleは、最初に読者の注意力や関心をまとはずれな方向にそらせようとする。つぎの文によると、

> Therefore you must not, in every case at least, take the higgledy-piggledy whale statements, however authentic, in these extracts, for veritable gospel celology. Far from it. (p. 7)

*'EXTRACTS'*として集められた鯨に関するたわごとhiggledy-piggledyを真面目に受け取ってはいけない、とまず読者に忠告している。しかし、この忠告を受け入れるべきではない。ここに書かれているFar from it. は文脈から、真に受けてはいけない、の文を否定しているのか肯定しているのか、どちらにも解釈できる。『白鯨』を読みすすめていくうち

に、読者はこれらの*'EXTRACTS'*が、たくみにかくされてはいるが、作品の意味や内容の理解のための重要な鍵になっていることがわかる。この鍵をもって開くとき、読者は作品『白鯨』がveritable gospel cetobogyとして、創作されたのだと理解する。

つぎの文は、ある比喩を伝えている。

> But gulp down your tears and hie aloft to the royal-mast with your hearts ; for your friends who have gone before are clearing out of the seven-storied heavens, and making refugees of long-pampered Gabriel, Michael, and Raphael, against your coming.

頭上高く登る、には、ヤコブの梯子の比喩が掛っている。royal-mastのroyalには原義として、*'Fast Fish and Loose Fish'*と*'Heads or Tails'*の章で鯨をroyal fishである定義しているが、そのroyalには、表面的には、英国王室に所属する鯨、の意があるが、さらに、天帝の、天の、神の、などの秘儀的な意味が入っている。royal-mastのroyalはそのような用いられ方をしている。seven-storied heavensは、占星術や錬金術の、向上、進化、変成、などの思考が入っている。Gabriel、Michael、Raphaelの天使に言及されているが、単なる中世的天界の天使の名としてあげられているのではない。

"Epilogue"

この章は、きわめて簡潔に語られている。すでに十分以上のことが語りつくされて、この章では、この作品全体の論理の一貫性がおのずから完結し、もはや説明の言葉を必要としないとすらいえる。

ここでIshmaelの不死身が明らかにされる。IshmaelとQueequegは、双子座のPolluxとCostorにたとえられていたが、神話によると、Polluxは不死身、Costorは必滅の身であったが、そのことが果されたかたちになっている。

渦の中心は、力の中心点、円転する運動の中心軸として、この作品の中心概念をあらわすものであるが、その渦の作用をこで見とどけることになる。

> So, floating on the margin of the ensuing scene, and in full sight of it, when the half spent suction of the sunken ship reached me, I was then, but slowly, drawn towards the closing vortex. When I reached it, it had subsided to a creamy pool. Round and round, then, at the axis of that slowly wheeling circle, like another Ixion I did revolve. Till, gaining that vital centre, the black bubble upwad burst; and now, liberated by reason of its cunning spring, and, owing to its great buoyancy, rising with great force, the coffin lid-buoy shot lengthwise from the sea, fell over, and floated by my side. (p. 724)

渦（vortex）の表象は、一角獣の角の渦巻模様として想像されているように、古くからある概念である。Ishmaelは、小舟から投げ出されただ一人海にただよう者となって、Pequod号が沈むときにできた大渦の円運動の周辺にいたために吸いこまれることなく、しかも円

の動きをまのあたりに見る。彼は、閉じかけた渦の中心に向ってぐるぐる回りながらゆっくりと近づいていく。渦はやがて、乳状の池 (creamy pool) のように白く泡立つ。この泡立ちは、白鯨が吹き上げる汐がつくる噴泉の池と同じように、spermの放射の状態の象徴である。白鯨がホーンの形をした岬と類似していることが折にふれ強調されてきたが、そのことの意味が、この *'Epilogue'* に集約されている。白鯨が豊穣のシンボルであることは、*'The Grand Armada'* 他、繰り返し述べられた。Pequod号が残した乳色の池は、岬のイメージと同様に繰り返しあらわれた、丸いもの、や、円環、のイメージに属する。*'Loomings'* の章ですでに述べたが、突出したもの、と、円環、の、イメージは、結局、可能なかぎり最小限度にイメージ化してしまうと、IとO、あるいはIとCの文字に簡略化、記号化されてしまうことが可能である。CはCircle, Centerなどの頭文字と考えてもよいが、また円型の一個所に途切れがあるもの、と考えることができる。IとO、あるいはIとC、これらは、記号化されたイメージであるから、結局、象形文字としての働きをする。*'Loomings'* の章ですでに述べたが、そこには、Manhattoeの島が、珊瑚礁にかこまれたインドの島々として連想され、波止場にかこまれ通商の波に洗われている、とえがかれている。通商の波、珊瑚礁の波、いずれも白波の連想があって、しかも外部との出入り口が一個所開かれている。*'Loomings'* は、章全体がIshmaelの深層心理の中から浮かび上がってくる幻想として描かれているが、この幻想は、万人の潜在意識の中に存在する共同幻想としてとらえるべきだろう。岬とそれを取り巻く白波の円環、これら記号化されたIとCにMelvilleがこだわるのは、やはり象形記号化されたHの文字との関連においてである。*'Loomings'* の章では、Ishmaelの幻想の中心には、二列に並んで延々と続く鯨の列の中心に白い頭布をかぶって儀式を主宰する雪の山のようなイメージがあって、それが白鯨のようであったが、この風景が、記号化されると、やはりHの文字の形に収れんする。これらの幻想風景はすべて、IとHとCの象形記号化できる、といえば無理があるだろうか。すでに見てきたように、この作品には、さまざまな概念が記号化され符謀のように並べられてある。Iの文字は、岬、や、柱、や、槍、などの象形記号としてとらえられることができるばかりでなく、一人称の私、つまり自己、自分自身の表象として受け取ることができる。そのことは、*'I and My Chimney'* の作品にかくされた象徴の意味からも明らかである。

IとCの中央にH、このことの意味も自明である。IHCは、いうまでもなく、Jesusをあらわす記号である。IHS、JHS、YHCとも綴られる。俗解として、Iesus Hominum Salvator (=Jesus, Savior of Men) 人類の救い主イエス、であるともいわれる。また、in hoc signo vinces (=in (or by) this sign thou shalt conquer) この印によりて汝は勝利を得ん、であるともいわれ、またIn Hoc Salus (=In this (cross) is salvation.) この十字に救いあり、であるともいわれる (英辞、研)。IHSは、IHCと綴られることもあるので、MelvilleがSよりもCの方をとったと考えられる理由がある。IとCの記号には、男性原理と女性原理

が表象されてリビドー幻想がうかがえるからである。

使用テキスト：*Moby Dick or the Whale ed by Charles Feidelson Jr.* (*Bobbs Merrill,* 1978)

Edgar Allan Poe's Works ed by James Harrison (*AMS Press, New York,* 1965)

1．「熊野太地浦捕鯨乃話」太地五郎作著(限定)（和歌山市打越町、昭和57年）p. 33

2．　同　上